

41491

教科書文庫

4
810
41-1929
200030 1420

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

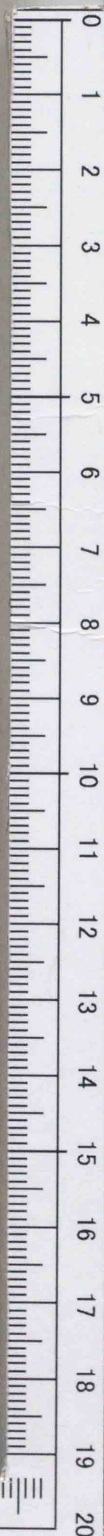


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

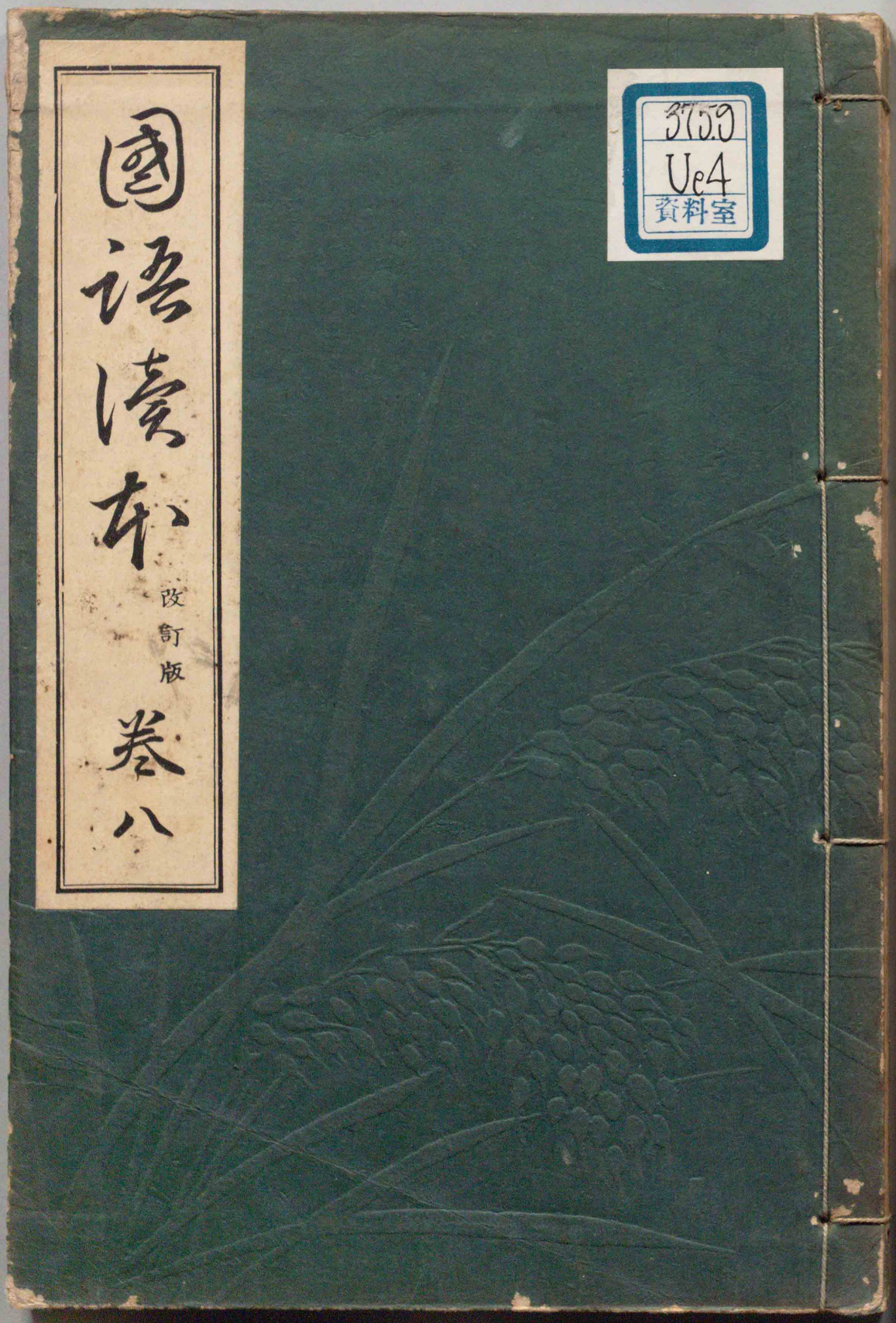
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Uc4
資料室

國語讀本
改訂版
卷八



資料室

375.9

Ue4

日五廿月三年四和昭
濟定檢省部文
甲科語國校學中

國語彙本 卷八

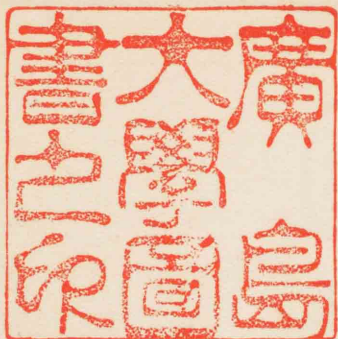
昭和改訂版

文學博士

上田萬年

榮田猛猪

鹽野新次郎 編 共



國語讀本卷八

目次

前篇

一 眞劍味

安岡正篤 一

道と術

松浦 一九

二 東洋の秋

芥川龍之介 二〇

三 自然の心友

藤岡作太郎 二四

山家集の後に

佐々木信綱 二六

四 月の前

上田秋成 二八

五 倫敦塔

夏目漱石 三〇

目次

六 塔影(詩)

河井醉茗 四

日本の塔

五十嵐 力 四

七 明治節を喜んで

野口米次郎 五

八 乃木大將の殉死

徳富蘇峰 三

九 天明調(俳句)

佐々醒雪 七

與謝蕪村

小林一茶 七

一〇 おらが春

(觀世流謠曲) 七

一一 羽衣

謡曲文學第一の興味

倉田百三 八

一二 人格の表出

竹田出雲 六

一三 寺小屋

十返舎一九 一〇

一四 膝栗毛

高山樗牛 一三

一五 平家雜感

(新古今集) 一三

一六 井出の玉川(和歌)

新古今集時代の歌

石原正明 一五

一七 金槐集の歌を評す

尾山篤二郎 一六

一八 松下村塾

徳富蘇峰 一三

後篇

徒然草抄

新村出 一

徒然草に就いて

新村出 一

一 つれづれなるまゝに

六

二 此の木なからましかば

七

三 同じ心ならん人

八

四 旅

九

五 折節のうつりかはり

九

六 心なぐさむ事

三

七 末の世こはいへど

三

八 諒闇の年

一四

九 過ぎにし方

一四

一〇 人の亡きあと

一五

二 雪のあした

一六

三 荒れたる庭

一七

三 法然上人

一八

四 稻葉の露

一八

五 堀池の僧正

二〇

六 石清水詣

二〇

七 足鼎

二二

八 名を聞くより

二三

九 いやしげなるもの

二四

一〇 入りたゝぬさま

二四

三 人の心

三五

三 下部に酒飲ますること

三六

三 猫また

三六

三 もろ矢

三六

三 寸陰惜しむ人なし

三六

三 高名の木登り

三七

三 唐のものは

三七

三 花はさかりに

三七

三 能をつかんとする人

三七

三 一道にたづさはる人

三七

三 さしたる事なくて

三七

三 降りくこ雪

三七

三 松下禪尼

三九

三 一事を勵むべし

四〇

三 くらちなは

四〇

三 最明寺入道

四一

三 人の物を問ひたるに

四二

三 主ある家には

四二

三 聖海上人

四三

三 佛問答

四四



— 乃 木 將 軍 —

乃木公武
 乃木實良
 乃木實良
 乃木實良
 乃木實良
 乃木實良
 乃木實良



國語讀本卷八

前篇

一 眞劍味

安岡正篤

日本民族の特有とし誇とする所は、あらゆる方面に於て固より少くないが、就中武士によつて大成された我が劍道ほど、莊嚴無比なる藝道は、他のいづれの國にもあるまいと思ふ。それは決して劍を弄する術ではない。必ずしも自己を守り敵を制する爲の手段でもない。實に一劍によつて、人間の心身を金剛不壞カウラシククワシクバウに打成ウチナリするウチナリことであり、全靈ケンレイを提

安岡正篤
哲學者。特に
 東洋思想に關
 する著述多

他種
 他種
 他種

けて大自在三味の道境に到るころである。その爲めに武士は劍によつて、儒といはず、佛といはず、神道といはず、一切の哲理を證悟し、これを體現したのである。「眞劍味」の一語、その生活を説き盡して餘蘊がない。

眞劍味とは言ふまでもなく、白刃を以つて敵に臨んだ時の心持である。

私も十六七歳の時分から二三年の間、始終白刃を以て劍法の型を學んだことがある。その經驗から言つても、決して今お互に生命のやり、こりをするのではない。たゞ劍法の型を練習するに過ぎないといふ場合でさへ、さて白刃の尖を交へて睨み合つて見るこ、忽ち總身がきり、こ引緊つ

煩惱
妄執

て、覺えず呼吸が凝つて來る。

拂つても拂つても、魔の影のやうに絶えず付き纏つて來る様々な煩惱も、こゝに來ると、ばつこそその影を收めて始めて緊張した我に還ることが出来る。私は毎日憑物のやうにこの境地を追うた。私は幾度小説を擲ち、案を拍つて、道場に飛び込んだであらう。さうして白刃を取つて立つ時、まさしく、我が生命の直流を感じた。

改めて白刃を取つて相對する。對手が上段にふりかぶつて、私の面上に「えい」と切り下す。それを一步退つてかちんと拂ふ。拂ふと同時に一步進んで對手の面をはつしと斬る。それを素早く退つて再び互に正眼の位置に復する。

正眼
青眼

人格
精神

竹刀
木劍

それは型の一つの順路であるが、而も型とはいへ、一つ間違へば、眞劍である、頭は石榴となる——と思ふと、否思はなくとも、潜在意識で心が騒ぐ。それで始めの中はどうしても気が後れる、體が進まぬ。たゞ劍だけがふら／＼と動く。けれども精神は異常に緊張してゐる。この時はつまり互の人格の内的統一が、まだ深められてゐないで、散漫なまゝで硬直してゐるのである。

併し眼前に閃く白刃は、猶豫なく人に迫つて解脱の道を直往せしめる。いつか回数を重ねる中に、相當竹刀の鍛錬を積んだものなれば、自然に氣劍體の三位が一致して、その三位の活動が、實は唯一者の唯一活動となつて来る。そこ

葛藤
軋轢

集中
集注

で始めて隙のない人格の純粹統一が現前するのである。そこには何等知情意の葛藤もない、主客の對立もない。渾然として統一せる意識本然の流行があるばかりである。所謂「無」か「誠」かといふのも、この境地に外ならぬ。

散漫な我々の生活では、なか／＼この經驗を體認することには出来ない。殊に現代のやうに、げば／＼しい色彩や騒ましい雑音に、絶えず神経を刺激せられ、且／＼こめのない機械的生活をしなければならぬ爲に、一層その精神が荒んでしまつて、日に／＼人格を傷けてゆく危期にあつては、特に深くこの精神の集中、人格の純粹統一の意義を考へる必要があると思ふ。

劍道の尊い所はこの眞劍味でなければならぬ。程度の差こそあれ、竹刀の稽古でも同じ道理であるが、兎にも角にも肉體同志の對立ではなくして、相互の眼前に、觸るれば骨に徹する痛みを與へる所の武器が、間斷なく打ちこむべき隙を狙つてゐるのである。これでは到底ふざけては居られぬ。勢ひ自ら精神を集中せざるを得ない。そこに一道の活氣が迸る。

兩刀を帶した武士は、常にこの眞劍味に生きることが出來た。さうして刀は人を斬る爲のものではなくて、己の魂を磨く爲のものであるといふ平素の教訓に、先人の尊い自覺と道心とが輝いてゐる。これを思ふと、現代人の生活に

妄想
妄念

は、全くこの眞劍味がない。現に私なども始終感ずることであるが、どうも生活が引き緊らぬ。ごもすれば、そはくして妄想の裡に動く。さうしては時々思ひ出したやうに刀を振つて見る。あの刀を取つて息を凝らした境地、機を熟するご共にさつご打ち込む瞬間の呼吸、その不盡の妙味を求めて見る。

實際初心の間は、どうしても心ご劍ご體ごがばら／＼の運動をする。氣ばかりあせつて體が動かない。體は動いても劍は無用に遊んでゐる。否、却つて邪魔になる。「さ、此處を打て。」言はれても、どうもびしりごゆかぬものである。その氣、劍體三位一致の工合によつて、竹刀ならば打つ音が

佛光禪師

支那宋代の僧
祖元、北條の
宗迎へて鎌倉
の建長寺に
く、佛光寺に
と諱す。弘安
九年(約六四
六〇前)寂。六
六十一。安師
置倉時僧

山岡鐵舟

山岡鐵太郎、
子爵、徳川氏
の舊臣、無刀
流の祖、明治
二十一年歿。

形而下
形而上

違ふ、刀ならば切口が違ふ。下手の使ふ竹刀の音は籟のやうであるが、上手が使へば音が冴える。刀も下手に使はせる物を段々に斬るが、名人が斬れば空を斬るに等しい。名人の位になるに、最早刀で斬るのではない、魂で斬るのである。有名な佛光禪師が、温州で元兵の爲に首の座に据ゑられた時の偈に、電光影裏斬春風といふ句があるが、山岡鐵舟の如き、劍の妙諦を極むるに及び、好んでこの句を拈弄したといふ。げにや、電光影裏斬春風は、應に形而下の劍を去つて、幽玄なる哲學的境地に入つた劍道の風光を象徴して無限の妙味があるではないか。(東洋思想研究)

露國を破つたのも此の力である。青島の獨軍を一舉にして壓倒したのも此の力である。

昔の武士が武士の魂の日本刀を以て大和魂を錬り上げる法は、劍道であつて、劍術ではなかつた。劍道指南は人を生死の巷に置いて、生死の外に超越せしめ、泰然自若たるを得しむる悟道を傳へたものである。この悟道を得たものは、活殺自在の力を得、百萬の敵をも一氣に摧く力を得る。即ち、有を挫く、無の力である。日本が清國を破つたのも此の力である。露國を破つたのも此の力である。青島の獨軍を一舉にして壓倒したのも此の力である。我々は腰から目に見ゆる兩刀を解いて了つた今日、なほ無形の刀を帯びて、昔の人が劍道指南の金看板を掲げて、その悟道を傳へた代りに、此處に立つて、文學の方面から、同じ道を常に説かうと思つて居る。我々の文學は文弱を醸すものであつてはならぬ。我々の文學は亡國の文學であつてはならぬ。

松浦一
東京の人、東
京帝國大學文
學部講師

芥川龍之介
東京の人、文
學者、昭和二
七年歿、年三十
七
日比谷公園
東京市麹町
區

西洋の文學を盲目的に燒直したものであつてはならぬ。若し我が國の思慮ある人々が、劍道でも劍術でも同じ事ではなにかと平然として言ふやうになつて了へば、その時は武士道が遂に滅亡し、日本が頽廢した時である。(道と術—松浦一)

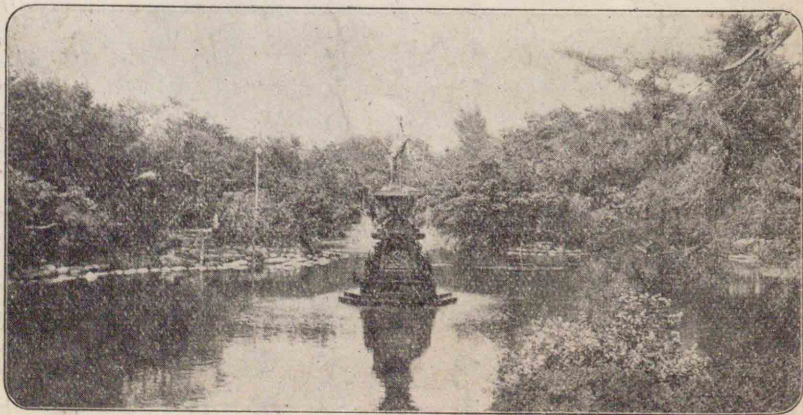
二 東洋の秋

芥川龍之介

自分は日比谷公園を歩いてゐた。空には薄雲が重なり合つて、地平に近い樹々の上だけ、僅かにほの青い色を残してゐる。そのせいか、秋の木の間の路はまだ夕暮が來ないうちに、砂も石も枯草も、しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の右左に枝を差交はした篠懸にも、露に洗はれたやうな薄明が、やはり黄色い葉の一枚毎に微かな陰影を交へながら、懶げに漂つてゐるのである。

自分は篠の杖を小脇にして、火の消えた葉卷をくはへながら、別に何處へ行かうといふあてもなく、寂しい散歩を續けてゐた。

そのうそ寒い路の上には、自分以外に誰も歩いてゐない。路をさし挟んだ篠懸も、ひつそりと黄色い葉を垂らしてゐる。ほのかに霧のかゝつてゐる行手の樹々の間からは、たゞ噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさゞめきを送つてくる。その上けふは、どういふわけか、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海の



(一 其) 園 公 谷 比 日

蕭條
肅殺

やうに、蕭條とした木立の向ふに静まりかへつてしまつたらしい。――と思ふと、鋭い鶴の聲が、しめやかな噴水の響を壓して、遠い林の奥の池から、一二度高く空へ揚つた。

そのうちに次第に黄昏が近づいて來た。自分の行く路の右左には苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一緒に、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の薫かも知れない。と思へば路端の水溜りの中にも、誰が摘んで捨てたのか、青ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。

自分は思はず足を止めた。

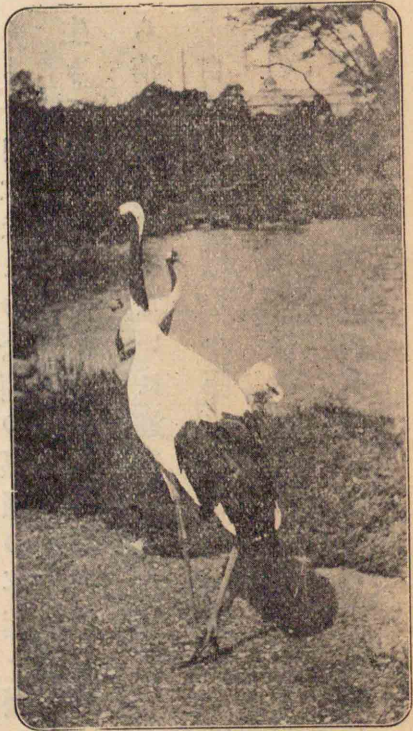
自分の行手には、二人の男が静かに竹箒を動かしながら、路上に明るく散亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巢のやうな髪こいひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破衣こいひ、獸にも紛ひさう



(筆之一) 得 拾

(筆翁可) 山 寒

な手足の爪の長さといひ、いふまでもなく、二人ともこの公園を掃除する人夫の類とは思はれない。のみならず、更に不思議なここには、自分が立つて見てゐる間に、どこから飛んで来た鳥が二三



(二其) 園公谷比日

羽、さつと大きな輪を描くと、黙然と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を争つて舞ひさがつた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒き散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。自分は徐ろに踵を返して、火の消えた葉巻を啣へながら、寂しい篠懸の間の路をもと来た方へ歩き出した。

寒山拾得

寒山は唐の隱者、寒巖に居る。拾得は同時代の奇僧、國清寺の僧に拾ひ養はる。これ各その名ある所以。二人互に往來して歡笑す。狀貧子風狂の如し。話をも一言一語を洞觀す。

藤岡作太郎

金澤の人、東園と號す。文學博士、明治四十四年四月十一日歿。

俊成

藤原氏、定家の父、平安朝末期の歌人、朝千載集の撰者。

が、自分の心の中には、いつか靜かな悦が、しつとりと薄明るく溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべき自分の迷たるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閑しながらも、今日なほこの公園の篠懸の落葉を搔いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懐かしい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないに違ない。

自分は篠の杖を小脇にしたまゝ、氣軽く口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。寒山拾得は生きてゐる。こ口のうちに獨り呟きながら。(沙羅の花)

三 自然の心友

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て、定家を難せん

定家

藤原俊成の子、鎌倉時代の歌人。

輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。こいはれし

時、稱讚の聲また定家に譲らず。近

世に至つて定家の價值いたく墜落

したれども、山家集の一書は、なほ如

何なる歌人の机邊をも去らず。西

行の名、今に嘖々たるは、抑、何が故ぞ。

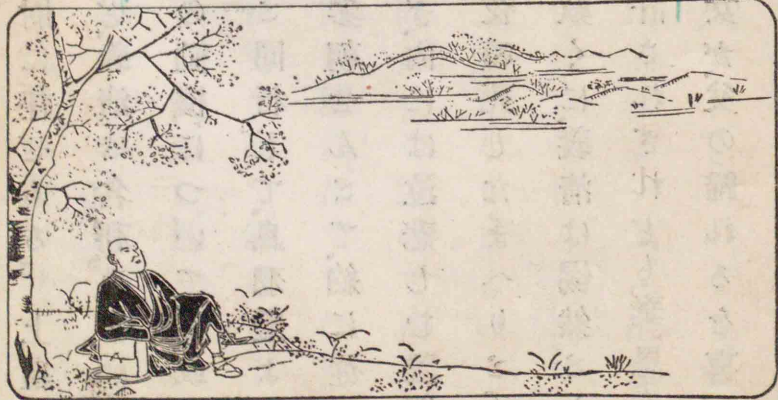
西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府

將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代

代武を以て家を立て、義清また勇敢

にして弓術をよくす。和歌に堪能

なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上



吉野の西行

厭離
出離

棄恩
流轉三界中、
恩愛不能斷、
棄恩入無
爲、眞實報恩
者、清信士度
人經

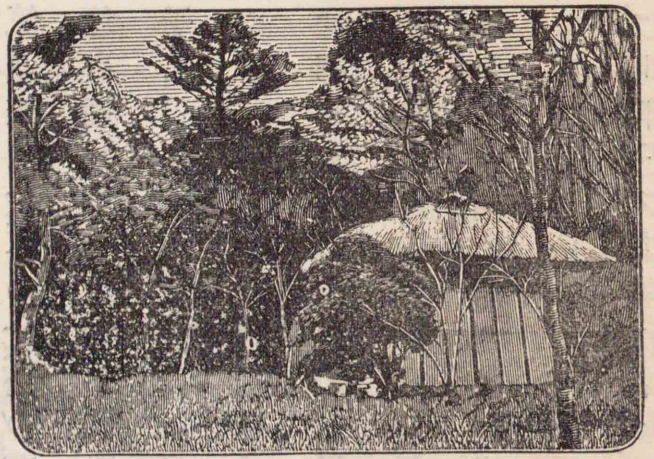
皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんことす。されど、義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんこと、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死したまへりて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて、取絶れるを思ひ切りて、縁より下に蹴落し、これこそ愛着

剃髮
落飾

保延
崇徳朝の年號。

右幕下
右近衛大將源頼朝

大師
弘法大師



西行菴

の絆を斷つはじめぞと、顧みもせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。かくて、名を西行又は圓位といふ。出家せるこき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に

高尾
京都府葛野郡
高尾山。神護
寺。

文覺
俗名遠藤盛
遠、源賴朝時
代の傑僧。

明障子

謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一個の
笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠
悠自適、興至れば即ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟
子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事
あるべからず。數奇を立てて、此處彼處に嘯き歩く條、憎き
法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。
その後、高尾の法華會に、行脚の僧の參りあひて、花の蔭など
眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行
と申す者。」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體に
て、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたる
に、御尋ね悦び入り候。とて、迎へ入れて、饗應に餘念なし。弟

打たれんず
打たんず

雙林寺

京都市圓山公
園の南にあり
天台宗。
建久
後鳥羽朝の年
號。

子だちは、いかなる事の出で來んか、手に汗を握りたるに、
この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰に違
ひたるは、怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いふがひなの法
師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、文覺を
こそ打たんずるものなれ。」といへりぞ。
西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん
ことを思ひて、詠じて曰く、
ねがはくは花のもこにて春死なん
そのきさらぎの望月のころ
晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違
はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。その

和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

わが國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者、前後僅かに三人、西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのその道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

宗祇

室町時代の
人、連歌師。

芭蕉

伊賀の人、元
祿頃の俳人。

應仁亂離

應仁元年（二
一二七）正月
亂起る。細川
勝元・山名持
豊・洛中に對戦
す、其亂十一
年に及ぶ。

元祿

五代將軍綱吉
の頃。

雲水

行雲流水

刺衝
刺激

そもく平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂・二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、従うて思想の發展もあることなし。見聞するところは、東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承けた、同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも、おのづから典型を生じて天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行一人蹶起して、從來蹈襲せる典型を簸却し、み

錦囊
吟囊

隱微
微妙

名聲赫々
名聲噴々

西行筆蹟
あめそぐは
なたちばな
風すぎてやま
ほととぎすく
もになくなり

づから山水の間に逍遙して、直接に自然の隱微なる聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠じ給へるこの世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、亦宜ならずや。

あめそぐはなたちばな風すぎてやまほととぎすくもになくなり

西行既に古來の典型を捨てて直ちに自然の堂奥に入ら

んごす。深く山川草木を愛して、之を視ること猶己を視るがごとく、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝに亦我が住みうくてうかれなば

松はひそりにならんごすらん

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、總て世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ、その親切なる慰藉に感ぜざる者は冷血無情の人のみ。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日をおくらまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑ惜しくなるいのちかな

愛着は迷なり。この雲を去らざれば真如の月は明かな

り難し。雖も山水もご無心にして、人間の如き魔性を有せ

ず。強ひて之に着するは、亦妄執の種なり。雖も、これを以

て窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心も亦物によつて動か

されざるこそ山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。

來往自在、こゝに疑懼の境も去つて、安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ、今日もくらさん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

安心
安心立命



—(筆春蓬口山) 師法行西—

心なき身にもあはれは知られけり
鳴たつ澤の秋の夕ぐれ (西行)

斧鑿
彫琢

松濤
松籟

厭ふごとくしもはれぬものゆゑ

西行の歌は、企てて成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。
ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹き來つて松濤即ち鳴る、その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を

加へねば、天成の詩美は千歳の下、愈、光を増して、後人をして
渴仰止まざらしむるなり。(國文學全史)

當時の歌風一般に絢爛華麗しかも其の間に所謂幽玄有心の
風趣あり。辭句の絢爛華麗を捨てて、ひそり自然平淡の風あり
し西行の歌は、一方にこの幽玄有心のこゝろを、最もよく、また最
も純に歌へり。彼が歌に通じて存する「あはれなる寂しみ」はこ
れなり。而して彼の歌風のこの幽寂や、實に其の源を當時の時
勢の底ひに流れ渡れりし佛教的厭世思想に有せり。彼は之を
最も深く感じて、最も切に歌へるものなり。しかも西行は、かの
業平と共に我が歌人中、最も多情多恨なる人なり。當時の時勢
と彼が性格とは、彼をして業平の如くならざらしめしのみ。さ

業平
在原業平、平
安朝の歌人。

れば西行が幽寂の思想を寓せる歌いづれもあだし法師の歌の
如く、或は悟り過ぎて冷たきもの、或はたゞに世をはかなみ、世を
厭ふのみにて、何等の感興もなきものの比にあらず。

彼の歌の幽寂の裡には、懐かしきあはれさあり、一種清新なる
情味あり。彼が胸は決して枯淡ならず、沈滞せず。さればこそ
數百年來、幾千の歌人が歌ひふりたる花も、月も、彼の胸の絲に觸
れては、新しき響を發したるなれ。

靜かなる雨の日、蟋蟀の聲たえくゝなる夕暮、水の音きよき山
里、波の聲さびしき海邊などにて、一人燈火のもこに繙きて、身に
沁みこぼる寂しき思深きあはれの、汲めども汲めども盡きせぬ
ものあるは、世に歌集は數多あれど、わが山家集をおきて他にあ
らんや。(山家集の後に「佐々木信綱」)

佐々木信綱
伊勢の人、竹
柏園と號す、
歌學者、文學
博士。

四月の前

上田秋成

上田秋成
大阪の人、國學者、文化六年(約九〇年)前、歿、年七十八。

その年
文治二年、後鳥羽朝。

大將殿
右大將源賴朝。

忌垣

瑞垣
玉垣

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へる。を大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに警衛して「あなごだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。廣前を罷りて御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと瘦せ黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食者の様したるを、鋭き御眼尻にごめさせ給ひ、たゞ人ならずや思しけむ、あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿ぞひの若侍、急ぎ走り寄りて「ありがたく御目給へり。何處よりの修行ぞ、名をも申せ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる様して「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて「さればこそ聞知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ。わが後につきて來れ。」といへ。とて召連れさせ給へり。

穴熊の
西伯將、出獵。ト之、曰、所獲、非龍、非非、影、非、虎、非、影、所、獲、非、王、之、輔、於、是、西伯、獵、遇、太、公、伯、也、(史記)於、渭、之、陽。

道行づと
家苞

八百日ゆく
八百日ゆく濱の眞砂を君が代の數にとらなん沖つ島守(後徳大寺實定)

きに驚きたる様して「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて「さればこそ聞知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ。わが後につきて來れ。」といへ。とて召連れさせ給へり。御館に入らせ給ひ、御装束あらためさせ給へば、やがておほごなぶら數多てらし掲げたり。「けふの道行づと率てこ。」と仰せ給ふ。「法師まわれ。」とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒く寒したれば、月花の譽は物の心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉ごも多く拾ひをさめたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。「いごも輝かしきにぞ、たゞ夢路を辿るやうに侍りて聞え奉るべき事も侍らず。ささき御眼に見あらはされて侍るこそいごも有

いかで……
……べき

こそ……
……侍れ

り難けれ。伊勢の海清き渚におりたつならひは侍れど、よろしき
貝をだにえ拾ひ侍らぬに、これにて捧げ奉るべくもあらず。君に
も豫て學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器
の大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思
ひ知り侍る。大空に羽うちて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の
音、いかで取りなめて聞え上ぐべき。あな畏しと申す。

打笑ませ給ひ、弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く明
らさまにご聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には、詠み得まじ
きものに、宮人達は沙汰し給へりごや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬
の嘶は物ごも思はぬを、この三十字餘りの學には心の後るゝは
如何に。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の
帝は馬に鞍おき御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし、その御歌を
讀み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ聞きわたり侍れ。

大風起り

大風起り 雲
飛揚 威加 海
内 守 歸 故
郷 安 得 猛
士 守 四
方 大 風 歌
漢 高 祖

烏鵲南に

烏鵲南に 鳥
月 明 星 稀
鵲 南 飛 繞 樹
三 匝 無 枝 可
依 山 不 厭 厭
高 海 不 厭 厭
深 周 公 厭 厭
心 天 下 歸 吐
曹 操 短 歌 行

秀郷

秀郷 藤原秀郷
鎮守府將軍藤原秀郷の親

いでや歌よまんこては、ますらをの心を取隠し、あてになよびかに
のみ詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさこ
く猛き御心のまゝに打詠ませ給はんには、今の世の人誰かは並び
あへ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚す。と歌ひ、槊を横
たへて、烏鵲南に。と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふなら
ずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、
はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路
出づる荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも、初より優れたらんは鬼
にこそ侍らめ。といふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るごも、頼もしき人の心ならず
や。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上
手ごなん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひし
ぬる事は忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。」こは

秀郷の親は
藤原秀郷の親

藤原秀郷の親

かほ…べき
 へ・慈しみをさ
 へ・瘦法師にだ
 病める士卒
 卒有_二病_レ疽
 之_一起_レ爲_レ史記吳
 起傳
 竈を減_レして
 孫臏使_二齊軍
 入_二魏地_一爲_レ
 十萬竈_一明日爲_二
 爲_二五萬竈_一又
 明日爲_二三萬
 竈_一龐清行_二我
 日_一大喜曰_二我
 固知_二齊軍怯_一
 日_一入_二吾地_一者
 士卒亡_二者

益、恐ある御問はせなり。御物語の果ては、武士の道しばしも
 怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の瘦法師にだに問はせ給ふこ
 との忝さよ。向ひ奉りては、烏澁がましく、何をかは家の傳はりな
 ごこと聞え奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの
 慈しみをさへ仇なるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家
 を出でたるいたづら者の、弦ひかんすべだに心にもごめ侍らず。
 たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし罰を軽くせよ。」と云ひしと任
 ずるものを辱しむれば危し。」と云ひし事このみ。病める士卒の疽
 を吮ひしは人の心をよく買ひなすも、眞の情よりとも覺え侍
 らず。竈を減じて人を危きに陥るゝは將帥のさかしきにて、國を
 始め天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へ
 る事の怪しきまで賢くおはするを餘所ながら聞き奉るには、この
 方の御問、免させ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

過_二半_一矣_一乃
 與_二其_一銳_一
 倍_二其_一行_一
 逐_二其_一暮_一
 當_二其_一而_一
 馬_二道_一隘_一
 可_二於_一阻_一
 斫_二大_一樹_一
 死_二於_一此_一
 下_二此_一史記
 子_一傳

え捕らぬ

君笑みほこらせ給ひ、口ごく心さかしき法師なり。今宵は月見
 の夜ぞ、人々こ土器取りはやし、曉かけて遊ばん。手あらうごは酒呑
 まざるべし、鹿猿の中に立交
 りて歌詠めこいふことも、詠む
 まじ、たゞ我が前にて遊べ。
 飽かず飲み、物きたなげに喰
 ひちらす人々は暖かにもこ
 そ。風ひや、かなるに、この
 火取、法師に參らせよ。とて、白
 銀をもて作れる、猫の形した
 るを取傳へて、君より賜はず。
 とて、前に置きたり。鹿猿はな
 ほ心猛し、鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がためには、げに似つかはしき



筆 齋 容 池 菊

物やはある
べき
物やあるべ
き

御賜物ぞ。とて、三度押戴きぬ。
あした、御暇賜はりて立出づるに御館の人やごりに誰人の童な
らん、括り袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ
取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。とて、かのきら／＼しき物を與
へて、顧みもせで立去りぬ。童打驚きて、これ見給へ、見も知らぬ法
師の見も知らぬ物賜ひつるは。とて、青侍に見すれば目口をはたけ、
「かく尊き寶物を誰かは得させん、拾ひやしつる。」といふ。「さらに更
に、道のそらに斯かる物やはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りてた
まへ。」といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいでて、しか
じかの事なんと申す。「いと怪し、大將殿の法師に賜ひしを、争で童
には得させけん、訝し。とて、まづ急ぎて聞え奉る。君打笑み給ひ、か
の似而非法師、あなづらはしく、幼げなるものくれしとて、腹立たし
くや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。一度似而非者の手

に穢れしもの、その童に取らせよ。とて取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、右府は寔にねぢけたる君な
り。口に蜜あれど心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の
智略あるに似て、天下の人皆この君の綱の中に入れられたるは、佛
の冥福といふことを生れ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御
裔の、此の後やう／＼衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙ごゞめ
難くして物がたりしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋
の夕暮ならずも、打撃みぬべし。(藤篋冊子)

○
御弓矢取らして御軍に立たせ給ふ

えせ者の手に穢れし物その童に取らせよ

大將殿の法師に賜ひしを争で童には得させけん

佛の冥福といふことを生れ得させけん

口に蜜あり
有蜜、腹
綱目。(通鑑

漢高云々

漢高は漢の高
祖。孟徳は魏
の曹操の字。

秋の夕暮

心なき身にも
あはれは知ら
れけり、鳴立つ
澤の秋の夕ぐ
れ(西行)

夏目漱石
名は金之助、
東京の人、文
學者。大正五
年歿。年五十。

五 倫敦塔

夏目漱石

二年の留學中、只一度倫敦塔を見物したことがある。其の後再び行かうと思つた日もあるが、止めにした。人から誘はれたところもあるが斷つた。一度で得た記憶を二度目に打壞すのは惜しい。三度目に拭ひ去るのは最も残念だ。塔の見物は一度にかぎると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其の頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された様な心持であつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此の響き、此の群集の中

マクス、ノ
ルダウ、
獨逸の社會批
評家。退化論
の著あり。
來るに
「碧巖錄」中の
語。

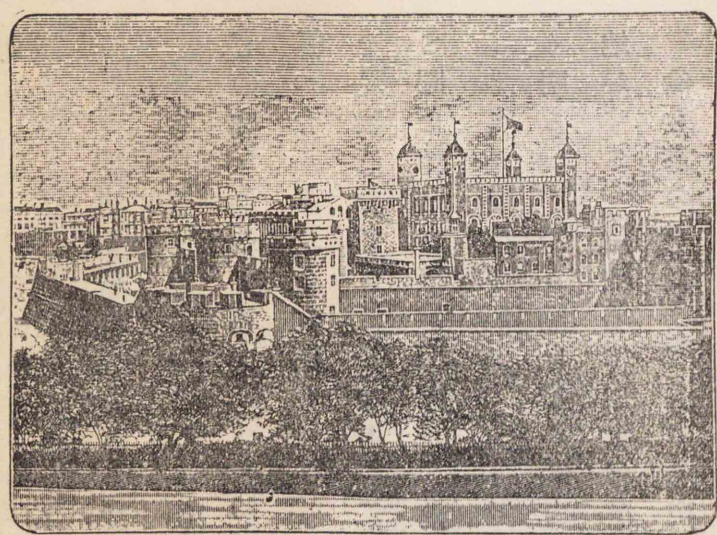
に二年住んで居たら、吾が神經の纖維も、遂には鍋の中の布海苔の如くべこ〜になるだらうと、マクス、ノルダウの退化論を、今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

「來るに來所なく去るに去所を知らず。」といふ禪語めくが、余はどの路を通つて塔に着いたか、又如何なる町を横ぎつて吾が家に歸つたか、未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。たゞ塔を見物しただけは慥である。塔其の物の光景は、今でもあり〜と眼に浮べる事が出来る。前はと問はれると困る。後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が、會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稻妻の眉に落ちると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焦點の様だ。

倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世

反射
反映

テームス河
倫敦市を貫流
する河。塔橋
を架す。



初めこいひながら、物靜かな日である。

紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流れが逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血の肉人の罪が結晶して、馬車汽車の中に取殘されるのは倫敦塔である。

此の倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだ時余は今の人が、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の

欄干

空は灰汁桶を搔交ぜた様な色をして、低く塔の上に垂懸つて居る。壁土を溶かし込んだ様に見ゆるテームスの流れは、波も立てず音もせず、無理矢理に動いて居るかと思はれる。帆掛船が一隻、塔の下を行く。風なき河に帆を操つるのだから、不規則な三角形の白き翼が、何時までも同じ處に停まつて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて、櫓を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白き影がちら／＼する。大方鷗であらう。見渡



橋 塔

した所、すべての物が静かである、物憂げに見える、眠つて居る。皆過去の感じである。さうして其の中に、冷然と二十世紀を輕蔑する様に立つて居るのが、倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らん限りは、我のみはかくてあるべしといはぬ許りに立つて居る。其の偉大なるには、今更の様に驚かされた。

此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの、角張りたるもの、色々の形状はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうして其れを蟲眼鏡で覗いたら、或は此の塔に似たものが出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が我が心の

九段

東京麹町區。遊就館は、靖國神社の境内にあり、古今の武器、武具を陳列す。

セピヤ

Sepia

裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を、吾が腦裏に描き出して來る。暫くすると、向ふ岸から長い手を出して、余を引張るか、怪しまれて來た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなほく、強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡りかけた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで驅けつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮遊する此の小鐵屑を吸収して了つた。門を入つて振返つた時、

憂の國に行かんとする者は此の門を潜れ。

永劫の苛責に遭はんとする者は此の門を潜れ。

迷惑の人と伍せんとする者は此の門を潜れ。

正義は高き主を動かし、神威は最上智は、最初の愛は我を作る。

憂の國に
伊太利の詩人
ダンテの作
「神曲」地獄篇
中の句

常態
變態
狂態

我が前に物なし、只無窮あり。我は無窮に忍ぶ者なり。此の門を過ぎんとする者は一切の望みを捨てよ。こいふ句が、ごこぞに刻んではないかと思つた。余は此の時既に常態を失つて居る。

哨兵
歩哨

空濠にかけてある石橋を渡つて行く、向ふに一つの塔がある。是れは圓形の石造で、石油タンクの状をなして、恰も巨人の門柱の如く、左右に屹立して居る。其の中間を連ねて居る建物の下を潜つて、向うへ抜ける。中塔とは此の事である。少し行く、左手に鐘塔が峙つて居る。鐵の楯、黒鐵の甲が、野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄ると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆる時も、塔上の鐘を鳴らす。必^レ傲れる市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せて、犇^レめき騒ぐ時も、亦塔上

祖來る時
逢^レ佛殺^レ佛、
逢^レ祖殺^レ祖、
於^レ生死岸所、
得^レ大自在。
(臨濟錄)

娑婆
婆娑

の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍もなく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら。余が頭をあげて、葛に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行く、右手に逆賊門がある。門の上には聖タマスタ塔が聳えて居る。逆賊門とは名前から既に恐ろしい。古來塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は、皆舟から此の門まで護送されたのである。彼等が舟を捨てて一たび此の門を通過するや否や、娑婆の太陽は再び彼等を照さなかつた。テームスは彼等にこつての三途の川で、此の門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に揺られて、此の洞窟の如く薄暗きアーテの下まで漕付け

擢權

られる。口を開けて翮を吸ふ鯨の待ち構へて居る所まで来るや否や、きいと軋る音と共に、厚櫂の扉は彼等と浮世の光を長へに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか明後日食はれるか、或は又十年の後に食はれるか、鬼より外に知るものはない。此の門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心は、ごんなであつたらう。權がしわる時雫が舟縁に滴る時、漕ぐ人の手の動く時毎に、吾が命を刻まれる様に思つたであらう。(漱石全集)

六塔影

河井醉茗

河井醉茗
名は又平、堺
市の人、詩人

墨繩たゞす番匠が
掌たなごの上に造られて。

朝、狭霧の晴れ行けば、
寶珠を天に捧げ持ち、
岸に聳ゆる五層塔。

藏めし經も蠹みて、
供養忘れし末の世の
雲を遮る勾欄に、
清き匏の痕見れば、
塵にほひに氣韻も残るかな。
秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。

四天の神
持國・增長・廣
目・多聞の四
天王

四天の神に守られて、
金輪際に根を埋め、
夜は北斗をうかゞへり。
家に住まざる山鳩の
巢くふに處得たればか、
虚空杳かに翔れども、
畫棟の朱の古びたる
浮圖を慕うて歸るらん。
落暉は西に傾いて、
五重の屋根のあざやかに、

重なりうつる草の上、
月は廂に浮び出でて、
九輪の影は水に在り。
雲の崖より吹落ちて、
風湖を拭ひ去る、
波の面に刻まれし
藝術の花に咲き散らふ
時の力の遠きかな。
その世に媚びし歌反古は、
層の嵐に破れたり。

生命の岸を下に見て、
天に呼吸する塔の
高き姿を水に見よ。(塔影)

私は塔の構造や歴史について更に知るところがない。けれども塔といふものには何ともいはれぬ面白味があるやうに思つて居る。殊に日本の塔には、他國のに見られぬ美しい味ひがあるやうに思つて居る。その美しい味の第一は、あの降り棟が綱を曳いたやうにシンナリとたるんで居る趣である。私は、最初、あのタルミは天幕のタルミから来たもので、本来熱帯國に生れた印度傳來の形式を受けたのであらうと思つてゐたが、其の後多くの繪や寫真やを見ると、印度や支那の塔は、多くはタルミの少い、木强的直線式で、あのタルミの美しさに於て日本の塔に及ぶものがないやうである。さすれば、あのタルミは、日本の工人

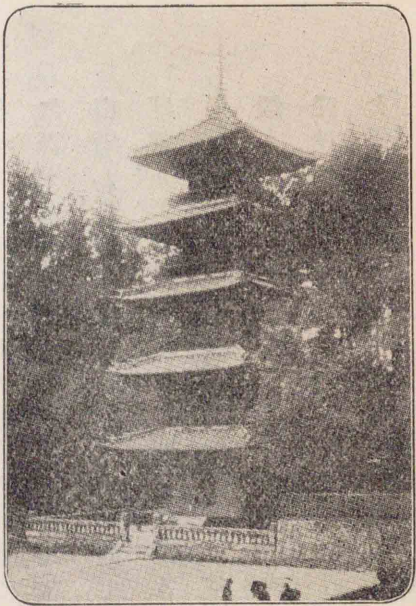
木强的
ごつくして
無骨なるこ
と。

王朝
主として平安
朝時代をい
ふ。

束帯

古昔の正服、
冠、袍、石帯、
下裳、表袴、
劍、笏、沓など
残らず装束す
ること。

十二單
女官の盛装し
たる装束。



五層の塔

が印度支那模倣の上に加へた獨創の新味でなからうか。丁度唐服を土臺にして我が王朝の束帯や十二單が出来たやうに、印度支那の無骨な木强的直線式に日本式のしなやかな美しさを加へたのではなからうか。

單に外觀だけでも、塔には實に挙げ盡されぬ美しさがある。久しく奈良に住んで居る友人が、曾て私に云つたことがある。

「塔ぐらゐる見飽きのしないものはありませんね。私は二十年から奈良に住んで殆ど毎日明暮に塔を見て居ますが、それが始終違つた味ひを見せてくれるから面白いんですよ。ほの／＼明けに森の霞の間から見える塔、月に照らされて、黒い影の隆起した部分のみが美しく光つて見える塔、日

九輪 塔の屋根の上
に輪の形の九
層かきなりた
るもの。

水煙 九輪の上にあ
る火鉢の形し
たる粧飾。

風鐸 風鈴の一種。

盛りて全面を露出して、あらゆる色彩構造を隈もなく見せる塔、金色の夕映を浴びて九輪のあたりに晚鴉の影を點じた塔、櫻花の間から望む塔、紅葉の隙から眺める塔、池の水に影をうつした塔、あたりに鹿の群を伴つた塔、雨にぬれた塔、落花に曇つた塔、夕立の横しぶきを浴びた塔、霜に冴えた塔、雪に厚化粧を凝らした塔、それらに皆味ひが違ひます。市街から望めば、臺の波の上に秀でた品の高い趣があり、森の中から仰げば、矛形笠形（まこがさかたち）の木々の間に馴染（なみじ）んで、しかも變化のある、層々九輪の言ひ知らぬ趣があり、山から見おろせば、森に護られた神靈の氣が九輪水煙となつて天を指して立ち騰るやうな趣がある。瓦の屋根が日光を受けて、波を打つて居るのも面白く、銅の屋根の緑青色が空と木立と緑を争つて居るのも面白い。真面目に考へれば、天にも登らうとする人類の向上心の現れとも思はれ、好事の心には飯事遊び（いひごころ）の積木細工が發達したのも思はれる。軒の先に吊つた風鐸（ふうちやく）のブラン／＼などいかにも稚氣があり、又茶氣があつて面白いではありませんか。それに九輪が累（かさね）つた末に行つてピンと跳ねたところなどは、空に透かすと、ま

鴟尾 しやちほこの
類。

五十嵐力 山形縣の人、
國文學者、早稲
學博士、早稲
田大學教授。

野口米次郎 愛知縣の人、
詩人、慶應義
塾大學教授。

るで大きな蜈蚣（むぐも）が尾を立てたやうで、それがあたりの佛閣の棟の鴟尾（しび）と向ひ合つて居る面白さなど、何ともいはれませんが。外觀だけでも此の通りですからね。これに内側の装置や思想上の意味など加へると、塔の味ひは、そりやほんとに言語道斷です。といかさま言語道斷であらう。（日本の塔―五十嵐力）

七 明治節を喜んで

野口米次郎

私は明治時代の重要な十數年間を海外で暮らして、遠く離れた外國から日本の發達進歩を眺めた……その力強い踏張り、その恐ろしい大股の歩み具合は、東天を破る朝日に譬へることが出來た。半世紀前の東洋一帯は、西洋人の眼には暗黒の荒野のみ思はれたであらう……この荒野に一つの小さい旭日旗が翻り出した。

そしてこの旗の翻るころ、自然は悉く「日本目醒めたり」の歌を歌つた。西洋人は千年の睡眠を破つて突立ちあがる人間の力を見

た……この力が、自國を禮讚し、愛國心をふりかざした時、世界無比のロマンチズムの火花を散らした。



利口軍令

ロマンチズム
Romanicism.

は事實に相違ないが、若し日本人にその性質の基調をなすロマンチズムの力がなかつたらば、日本に御維新の大改革も、日清戦争も、乃至は日露戦争もなかつたであらう。私は明治時代をロマンチック復興と呼んで、その大精神を歎美したい。御維新の御誓文にある如く、智識を世界に求めたが爲、日本人は東洋人に珍しい理

智的議論を了解するやうになつた。然し日本人がロマンチズムの力で、言ひ換へると、愛國心を思想の中心としたが爲に、近代的理智も整然と統一されるに至つたのだ。批判的に見ると、明治時代の精神は概念的であつた、非創造的であつた、西洋摸造であつた。こさへ云へるが、私共はこのロマンチズムの力で西洋摸造に一特徴をつけ、不思議な現象と仕立てあげる事が出来たのである。

如何なる國でもその社會的進歩は、一時的流行と、古典的反省との争ひ、これらの二つがお互に掣肘し合つて落着く所がら顯れる。外面的にこれは妥協的に見えるけれども、深く心理的に見ると、それら異つた二つのものが完全に自己を主張した状態である。自他互に許すといふ心理的境地から眞實の進歩は生れて来る。明治時代の西洋摸造が、傳統的ロマンチズムのため單に摸造に終らず一異彩を輝かすに至つた時、私共日本人のロマンチズムは、

掣肘
牽制

少しも破壊されなかつた。寧ろロマンチズムは更に新しい活動の場所を外來思想や物質的現象に見出したのである。

今詳細に亙つて明治時代の大きな改革や事件を見るに、政治上に、陸海軍に、社會改良の上に、私共はそのいづれにも西洋摸造の跡を見るけれども、實際をいふと、私共はそれ等を通じて新しい人間力の世界、感情發露の世界、美の禮讚の世界、即ち一言でいふとロマンチズムの世界を見出したのである。日清日露の二大戦役は、日本の傳統的ロマンチズムが最高潮に達した場合で、この場合に所謂西洋摸造は實に創造的光輝を天下に放散したといへる。

一國の價値はその影響が他國に及ぶや否やで決定せられる：明治時代は實に偉大な時代であつた。如何となれば、日本は東洋全體に覺醒を叫んだ。もつと廣くいふと日本は世界に東洋の存在を今更のやうに教へた。世界は圓いといふ事は地理學では

高潮
高調

藤田東湖
名は彪、水戸の儒臣、安政二年（約七〇年前）歿、年五十。
天地正大氣
東湖の正氣歌に「天地正大氣、粹然鐘三神州。」

昔から教へて居つたが、西洋人は東洋の一半を知らず、彼等は單に半分の世界だけに住んで來た。然るに彼等に東洋といふ半分の世界があることを明瞭に教へたものは誰か。誰でもない日本といふ小さな島であつた。日本は世界を圓いものにした。この功績ぐらゐ偉大なものはない。國の價値は決してその面積の大小では定らない。藤田東湖の謂はゆる天地正大の氣の集つてゐるや否やが重要な問題だ。即ち日本はこの壯烈無比の靈氣に溢れて、今日のやうに堂々たる一強國となるに至つたのである。

然し、若し日本が單に海陸軍の上に於てのみ強國であつたならば、日本はもとより眞實の意味での強國でない。眞實の強國は人を殺し他を侵すことだけを知らぬものでない……私共は人間生活を愛し、他を愛撫すること己に於けるが如く思ふ人情の國であらねばならない。眞實の國は愛の國でなければならぬ。過去の日

本は詩の日本であつた、美の日本であつた。明治時代の二大戦役は侵略主義の結果でなかつたことは言ふまでもない。これ等は、私共が自己防衛をロマンチズムの中に見出した戦争であつた。戦争のための戦争でなく、平和を得んがための冒險的の手段に過ぎなかつた。

日清戦争は日本の獨立的存在を十分に説明したに相違なかつたけれども、西洋人は日本と支那との相違を知つたのみで、決して日本を自分と同等に價値ある最良な國民とは思はなかつた。米國の或通信員の如きは、寫眞入りの講演を米國各地で開き、我が將卒の武勇の状を示しつゝ、彼等は野獸のやうに強い……彼は鬼將軍である。などといふ言葉を使つた。この場合ほど私共の紳士的價値を傷つけられた事はなかつた。私共は決して人を殺すことに興味を持つ野蠻人ではない、私共は米國人に劣らない文明人で

あると信じた。少くとも私は、日本人が文明人である、多くの場合は彼等米國人以上に。といふことを説明するの責任を果たさねばならぬと決心した。私の所謂日本主義はこゝに發芽して、爾來三十年近くも私はこの説明に力を盡してゐるのである。

日清戦争の當時、米國に於て日本は相當の尊敬を集めるに至つたが、戦争が終結すると共に、日本は米國人一般の注意から自然に外れて行つた。そして私は益奮闘一番せねばならぬと決心した。私は自ら精進して自分の價値を磨き、自分の日本人としての魂に文學的光澤を放たせることが、とりも直さず日本人全體を説明することであると思つた。ヨネノグチといふ日本人の一部分は、變じて日本人全體に通用することが出来ると思つた。故に私は自分を完全に詩人たらしめることが、私の國家に盡す任務であると思つた。私の日本主義は、單に私だけのものではあるが、擴げて以

精進
勇猛精進

評價
聲價

て日本人全體の主張とすることが出来る、又さうなければならぬ
いと信じた。日清戦争以來、日本並びに日本人に對する西洋人の
興味も段々加はつて行つたことは事實であるが、私共の期待か
ら見ると、私共は依然として彼等に野蠻人たるに過ぎなかつた。
私は、その後渡英して一詩集を倫敦で出版するに至つたが、それ
が相當に評價された時、私の海外に於ける日本主義も着々その
歩をすゝめ行くに喜ばざるを得なかつた……海外に於ける日本
の聲價の増進するに従つて、私の文學事業も認められて行つた。
私は英國より米國へ歸る大西洋上で、日露の破裂を耳にした。
米國に於ける正義の叫びは日本謳歌となり、日本帝王の禮讃とな
つて湧きかへつた。私はこの當時の米國人を追憶して、彼等も日
本人と等しくロマンチズムの國民であると感じざるを得ない
……彼等の理智に私は驚かないが、彼等の感情が熱した場合、彼等

は驚くべき國民である。私は「進軍の詩」を作つて米國で發表した。
日露戦争當時に於ける明治天皇の御雄姿は、萬雲を貫く富士山
に譬ふべきもので、その大稜威は十方無碍に互らせられると思は
れた。海外にゐた私共は言ふまでもなく、總ての外國人にも、天皇
こそ世界に於ける最も偉大なる帝王でおはすと映じた。そして



明治天皇御
宸筆

花はくはし櫻もあれど此やどける世々のこゝろを我はとひけり
 小梅の徳川
 侯邸へ行幸
 戸の時特賜
 御製と承る。

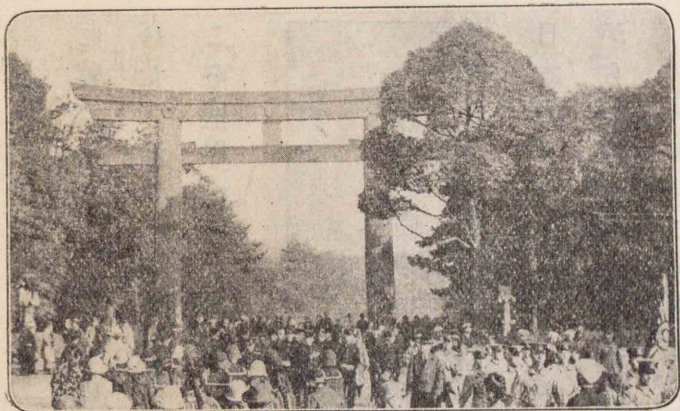
日本のロマンチズムは決して乾坤一擲の賭博でなく、所謂神な
がらの道へ捧げる犠牲心に外ならなかつた。天皇は歌ひ給うた。
おのづから仇の心も靡くまで
まことの道をふめや國たみ

神明も御照覽あれ、私共日本人は傳統的に平和の國民である。

若し武勇の國民であるならば、それは平和のために武勇の道を取るべく餘儀なくされた國民である。

私は日露戦争のまだ終らないうちに歸朝して、如何に全國民が愛國心に燃えあがつて居つたかに打たれ、十年以上に亙つた外國生活が私をこんな外國化しなかつたことを喜んだ。私自身にしても、外國の思想や感情を取り容れてゐる、私の日本魂の是認する範圍で外來の思想感情を是認してゐる。今日日本の過去長きに亙る文化史を見るに、外來文化が悉く日

是認
肯定



其の日の明治神宮

特殊
特種

本化されてゐる、別の言葉でいふと、風土化されてゐるといへる。もとよりこれを批評的に見れば、その價値は獨創的のものでなく、第二次的に止まるやうに思はれるが、私共が外來文化を日本魂で整理し、蒸溜し、統一した時、そこに特殊の光彩を放たざるを得ない。そしてこの日本魂が愛國心の情熱で燃える時、私共は飛躍する冒險を恐れない。私共は極めて勇敢な實行家たることが出来る。若し私共に愛國心が薄らいだならば、私共日本人の最大特異質は亡びたのである……愛國心が故國の自然禮讚となつたとき、私共は詩人である。又それが帝室崇拜となつたとき、私共は思想感情の中心を得て、私共の國家的行爲が立派に純化され、完全に統一される。

私は明治時代に生れ、その莊嚴優美な精神に觸れたことを喜ぶ。そして今なほ大正昭和へ生きて、明治時代の精神を追慕憧憬し

七 明治節を喜んで

て、自ら精進の道を清めることの出来るのを幸福とする。近來世界的といふ言葉が流行するが、自分を忘れ自國を捨てて世界的でない。眞實に日本的となることが、畢竟世界的となる所以であることを知らねばならない。(私は現代風景を切る)

八 乃木大將の殉死

徳富蘇峰

徳富蘇峰
名は諸一郎、
熊本の人、文
章家

乃木大將の自殺は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟も心ある者は、何人も皆自己に與へられたる一大鐵槌として、之を受用するを禁ずる能はず。然も若し乃木大將自殺の目的、之に存すこ云はば、これ決して大將の本意にあらじ。恩賞は功勞に伴ふ、然も若し恩賞を邀へんが爲に、身を致して君國に奉ず

こ云はば、これ忠臣義士の心を以て、單に商賣根性視する者なり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善

遺言條

乃木大將の遺言條
乃木大將の遺言條
乃木大將の遺言條
乃木大將の遺言條

乃木大將自書

用するは吾人の責任なり。されど後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に特に自殺したりこ云ふに至りては、これ

誣ふ
強ふ

汚風惰俗
良風美俗

乃木大將の心事を誣ふるや、亦甚だし。

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、其の遺言書の第一條に於て盡したり。曰く、

御大變
御大故

行徑
徑路

聚訴
聚訟

自分此度御跡を追ひ奉り、自殺候處恐入候。其の罪不
 輕存候。然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ、其の後死
 處を得度心掛け候へども其の機を得ず。皇恩の厚に浴
 し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち
 候時も無餘日候折柄、此度の御大變、何こも恐入候次第、茲
 に覺悟相定め候事に候。

こ、大將自殺の行徑や、此の如く明白なり。其の心事や此の
 如く光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

吾人は爰に乃木大將の事歴を説くの煩を要せず。彼は
 事ある毎に、其の死處を尋ねたるに相違なし。二十七八年
 役に於ては、彼は旅團長として出征したり。即ち一部將に

二兒
 長子勝典、
 兵中尉、南
 山の戦に死
 す。次子保
 典、旅歩の
 戦に死す。順
 兵少尉、旅
 歩の戦に死
 す。

南山
 遼東半島、金
 州城の南方、明
 治二十七年五
 月二十七日、我
 が軍苦戦して
 占領す。勝典
 之に死す。

過ぎざりき。されど三十七八年役に於ては、彼は第三軍の
 將として出征したり。彼の責任や、實に重大なりき。彼は
 二兒と共に家を出で、三棺並べざれば、葬送する勿れと家人
 に戒めたりき。彼も亦人の父なり。

山川草木轉荒涼。 十里風腥新戰場。

征馬不前人不語。 金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にして之を讀むも、尙黯然た
 らざるを得ず。況や此の時に於て、彼の一子を失うたる事
 實を識る者は、彼の胸中の暗涙萬斛なりしを察して、自ら泣
 かざらんことを欲するも能はざるなり。彼は本來多恨多情の
 好漢なり。唯武士道の鍊磨の爲に剛腸の武夫たるのみ。

旅順 遼東半島の西端、我が軍の尤も悪戦苦闘せしところ、保典之に死す。

日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、之を壓抑するにあり。一首二十八字、字々これ血液の結晶なり。旅順攻圍軍は、古今未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊大隊はおろか、殆ど聯隊の全滅さへも繰返したりき。而して豫期より半歳を超過して、漸く開城を見るに及べり。此の役に又他の一兒を失へり。此の如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

王師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。

愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

彼は實に「一將功成萬骨枯」の事實を痛切に感じたり。彼の鋭敏なる良心、責任心、廉恥心は、又もや彼を驅りて幾回か自

一將功成 澤國江山入戰國、生民何計樂樵鷲。事君莫一將封侯、萬骨枯。已亥歲、曹松。

自決
自裁

決せしめんご欲したりき。されど彼は餘儀なく其の死處を待てり。

結髮
弱冠

三十七八年以後の乃木大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧たりき。然も獨善は彼の屑しとする所にあらず。彼や結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學ぶ。

沒交渉
風馬牛

彼や滔々たる世潮に對して、固より沒交渉なる能はざりき。されば及ぶ限りは之を支持し、之を矯正し、彼の所謂躬ら行ふ所を以て之を他に及ぼさんご欲したりしや明けし。而して彼を學習院長に擢用し給ひたるは、これ先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に措き給ひたるものなり。彼や先帝の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來、彼の孤

奉公
報効

獨なる家庭、淡枯なる生活、自損利他の行徑、奉公獻身の精誠は深く先帝の鑑獎嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大用せんこの議を上る者ありしかども、先帝は固く執りて容し給はざりし程なりき。これ彼を以て人の師表たるべき者ご御推信ありしが爲のみ。彼の進路や、曲折頓挫、決して和易輕快なりと言ふを得ず。而も其の晩節に於て、聖天子の知遇を辱うす。彼や實に鞠躬盡瘁、老の將に至らんことを知らざりしが如し。

鞠躬盡瘁
鞠躬如

然るに思ひきや、御發病となり、遂に崩御ならんことは、何人も彼の心中を知る能はず。されど彼や若し祈るべきものなりせば、畏れながら身を以て代らんご祈りしに相違

いさ知らず
いざ行かん

南洲
西郷隆盛

蛇足
贅疣

なからん。彼は最後迄御平癒を信じたりき。而してそれさへ水泡に歸したり。彼が此に於て、一死を以て先帝に殉したるは、餘人に於てはいさ知らず、彼に於ては極めて自然なり。彼や死處を求めて、死處を得たり。單に死處よりすれば、南洲の企て及ぶ所にあらず。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、何ぞ況や他人に當て附くるに於てをや。うつし世を神さりましたし大君の

御跡慕ひて我はゆくなり

只此の如きのみ。これ以上の解説や註釋や、これ蛇足のみ。蓋し乃木大將は先帝に殉し、其の夫人は大將に殉す。彼等夫婦の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌

千古不朽
千載不磨

を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門、皆國事王事に斃る。明治大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は、此の如くして出て來れり。嗚呼哀しいかな。

◎三十七年冬、東郷大將幕僚を率ゐて、一時闕下に歸奏す。滿都の歡迎人、海の如き中を、大將は恭敬肅々、頭を低れ舉手して過ぐ。その戰塵に侵されたる半白の鬚鬢、慈愛に充ちたる神の如き眼、頗る人の同情を動かす。

◎當時露國東航艦隊なほ途にあり、戰局の大勢未だ定まらず、大將の胸中果して如何。而して彼が深沈寡黙、慘として驕らざるの態度は、人意を強うするに足るものなくんばあらざりしなり。

◎東京に於て第一回凱旋行軍の催さるゝや、軍司令官の馬車一輛空しく列中に在り、都人の翹望する乃木將軍は在らず。滿場、稍、望を失ふ。

◎既にして參謀將校の一團、轡を並べて進行する中に伍して、乃木大將は其の愛馬に鞭ち、滿身の愛嬌、歡迎人に向つて忙しく、舉手注目、禮を爲し來る。滿街の喝采、爆然として地を撼かす。

◎而して彼が歡迎の小學兒童の列に向つて、特に愛の目を注ぎたるは、吾輩をして潸然として涙を濺がしめき。

◎一言以て二人の性格を蔽へば、曰く、乃木は嚴毅にして愛すべく、東郷は沈黙にして畏るべし。

◎乃木は亭々たる數十丈の銀杏樹の如く、老幹下枝なくして猥りに攀づるを許さざるも、青天に簇々たる黄葉、頗る親しむべきの風情あり。葉飛び實熟すれば兒女も亦その下に集まる。蓋し寒風の空に聳ゆる喬木の、尤も愛嬌あるものならずんばあらず。

◎東郷に至つては、溪間に峙つ巨大なる花崗岩の如きか。其の龐大にして圭角なきは、風水に浸蝕せられたる火山岩の奇景あるに比すべく

もあらず。然れども烈風急流を以てするも如何ともする能はず。而して細かに檢すれば、絶壁處々、岩皺古苔むして細花開き、或は風媒の播種に小木短草の自ら春をなせる、また言ふべからざる風趣の存するもの無くんばあらず。

◎東郷は平にして大なるも、其のうちに奇景を含み、乃木は嚴にして高さも、自ら和平の氣に富む。

◎東郷坂の名頗る高くして、大將邸の玄關は甚だ小なり。乃木の赤坂に居るや、頗る久しくして、矮屋、却て馬屋敷を以て著聞す。彼の愛馬のみは煉瓦屋に住すればなり。

◎二人は恭にして儉、小心翼々として其の分を守る。世の所謂律義にして思ひやり多し。以て六尺の孤を托すべきの人たらずんばあらず。

(乃木と東郷―横山健堂)

九天明調

春の海ひねもすのたりくかな

燕村

東郷坂 東京市麴町區上六番町
乃木邸 赤坂區新坂町六尺の孤
會子曰、可_レ以_レ託_二六尺之孤_一、可_レ以_レ寄_二百里之命_一、而_レ不_レ可_レ奪_二也_一、君子人_レ與_レ、(論語泰伯篇)

燕村 姓 與謝

いかだしの葉やあらしの花ごろも 燕村

大祇 姓 炭

白雄 姓 加舎

蓼太 姓 大島

さみだれやある夜、竊に松の月 蓼太

曉臺 姓 加藤

樗良 姓 三浦

移竹 姓 田川

闌更 姓 高桑

いかにの葉やあらしの花ごろも

やぶ入の寝るや一人の親のまへ
花芥子に組んで落ちたる雀かな
五月雨もある夜ひそかに松の月
太祇
白雄
蓼太

さみだれやある夜、竊に松の月

秋の山とところづくにけむり立つ
飯どきや戸口に秋の入り日かげ
冬枯やあくたしづまる川のそこ
枯蘆の日にく折れて流れけり
曉臺
樗良
移竹
闌更

九天明調

かれ蘆の川
に流れて
更けり

召波
姓 黒柳

か
れ
蘆
の
川
に
流
れ
て
更
け
り

なにを釣る沖の小舟ぞ笠の雪 召波
蕭條として石に日の入る枯野哉 蕪村

○

蕪村は天明調の代表であり、芭蕉以後最大の俳人である。これを元祿期のものに比べると、題材も華美で、修辭の巧緻も確かに進んで、一體に華やかな、印象の鮮明な句である。但しそれが爲に元祿蕉風の特徴であつた幽かな寂のある趣は失はれてゐる。たゞへば元祿の俳諧は一脈の香烟のあるかなさかの薫である。天明調は香水の鼻を撲つ香に近い。彼ここは由來別種の趣味であつて、漫りに軒輊すべきものではない。

(與謝蕪村—佐々醒雪)

一〇 おらが春

小林一茶

小林一茶
通稱彌太郎、
俳諧寺と號す、
信濃の人、
俳人、
文政十一年(約九〇年)歿、
五十年前



昔丹後の國普甲寺といふ處に深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は世間祝をしてさゞめければ、われもせんこて、大晦日の夜、ひこり使ふ小法師に手紙認め渡して、あすの曉にしかゝせよと、きこひひ教へて、本堂に泊りに遣りぬ。小法師は、元日の旦、未だ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じくがばと起きて、教の如く表門を丁々叩けば、内より「いづこより」と問ふ時、西方彌陀佛より

年始の使僧に候。と答ふるより早く、上人裸足にて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じてきのふの手紙を取りて、恭しく戴きて讀みて曰く、それ世界は衆苦充滿に候間、早くわが國に来るべし。聖衆出迎ひして待入り候。と讀み終りて、おうおうと泣かれけるこかや。

この上人、みづから企み拵へたる悲しみに、みづから歎きつゝ、初春の淨衣を搾りて、滴る涙を見て祝ふとは、物に狂へるやうながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とす。聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひ盡しも、厄拂の口上めきて、そらぐしく思へば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになん迎へける。

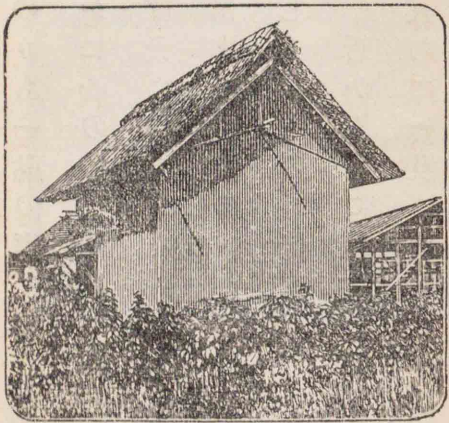
骨頂
骨頭

竹植うる日
陰曆五月十三日、竹酔日といふ。
うきふししげき
古今集に凡河内射恒、もの思ひける時、いとなき子を、見よめると題して、今さらになに生ひいづらん竹の子のうきふししげきや。

めでたさも中位なりおらが春

こぞの夏、竹植うる日のころ、うきふししげき浮世に生れたる娘、ものにささかかれきて、名を「ささこ」と呼ぶ。

こさし、誕生日祝ふころほひになり、てうちく、あは、天窓てんてん、かぶりく、振りながら、同じき子ごもの風車といふもの持てるを、しきりにほしがりてむづかれれば、さみに取らせけるに、やがて、



茶の住みしちや

むしやく、しやぶつて捨て、露程も執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめぐりく、むしるに、よくした、よくした。とほむれば、まこと思ひ、きやらきやらと笑ひて、ひたむしりぬ。心

のうち一點の塵もなく、名月のきら／＼しく清く見ゆれば、なかに心の皺を伸ばしぬ。又、人の來りて、わん／＼は何處に。と言へば、犬に指さし、かあく／＼は。と問へば、鳥に指さすさま、口もこより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戯る、よりも優しくなん覺え侍る。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、直ちに物投げすて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、踊らせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて興あるわざならんこ、わが身につもる老を忘れて、憂さをなん晴らしける。

より／＼思ひ寄せたる小兒をも、遊びづれにもこゝに集めぬ。
名月を取つてくれるこ泣く子哉（おらが春）

二十五菩薩
觀音・勢至・普賢・虚空藏等二十五の佛、經説に、阿彌陀佛が二十五菩薩を從へ音樂を奏し、行者を臨終の行きて迎ふといふ。
老を忘れて
道歌に「這へばたて立てば歩めと親心わが身につもる老を忘れて」とあり。

ワシテ 天人
ワキツレ 漁夫

風早の

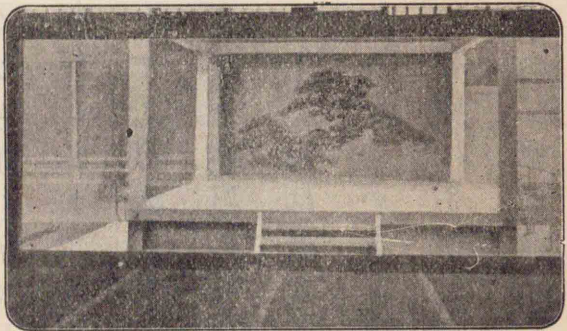
風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の浦人さわぐ浪立つらしも（萬葉集）

萬里の好山

千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴（詩人王屠）

忘れめや
忘れずよ清見が島の浪間よ、りかすみて見えし三保の松原（續古今集、中務卿親王）

一一 羽衣

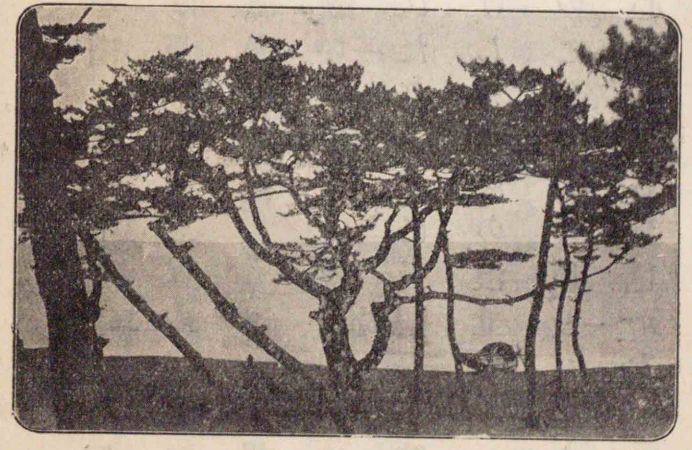


ワキ一聲「風早の三保のうらわを漕ぐ船の、浦人さわぐ浪路

かな。ワキサシ謠「これは三保の松原に、白龍ご申す漁夫にて候。ワキツレ謠「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつゞく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心そらなる景色かな。歌「忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三

風向ふ
浪立つと見
釣せぬ先に歸
る舟人(冷泉
爲相)

保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ、雲の浮浪たつ
ご見て、釣せて人や歸るらん。
待てしばし、春ならば、吹くもの
どけき朝風の、松は常磐の聲ぞ
かし。浪は音なき朝風に、釣人
多き小舟かな。ワキ詞、われ三保
の松原にあがり、浦の景色をな
がむる所に、虚空に花ふり、音楽
聞え、靈香れいこう四方に薰ず。これた
だごごご思はぬ所に、これなる
松に、美しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の



松 衣 羽

衣にあらず。いかさまごりて歸り、古き人にも見せ、家の寶
ごなさばやご存候。

シテ詞、なう、其の衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候程に、ごりて歸り候よ。シテ詞

「それは天人の羽衣ごて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。
元の如くにおき給へ。ワキ詞、そも此の衣の御主ごは、さては
天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めお
き、國の寶ごなすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞、悲
しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんごご
も叶ふまじ。さりごては返したび給へ。ワキ謠、此の御詞を
聞くよりも、いよく、白龍力を得、詞もごより此の身は心

天の原
丹後風土記の
歌

なき、天の羽衣取隠し、シテ謠叶ふまじこて立ちのけば、
 今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんごすれ
 ば衣なし。ワキ謠地にまた住めば下界なり。シテ謠ごやあら
 ん、かくやあらんご悲しめど、ワキ謠白龍衣を返さねば、シテ謠
 「力及ばず、ワキ謠せんかたも、地謠涙の露の玉鬢、かざしの
 花もしをく、ご天人の五衰も、目の前に見えて、あさましや。
シテ謠天の原、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ
 知らずも。地謠棲馴れし、空にいつしかゆく雲の、羨ましき景
 色かな。迦陵頻伽のなれくし、聲今更にわづかなる、雁が
 音の歸りゆく、天路をきけば懐かしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行
 くか歸るか春風の、空に吹くまで懐かしや。

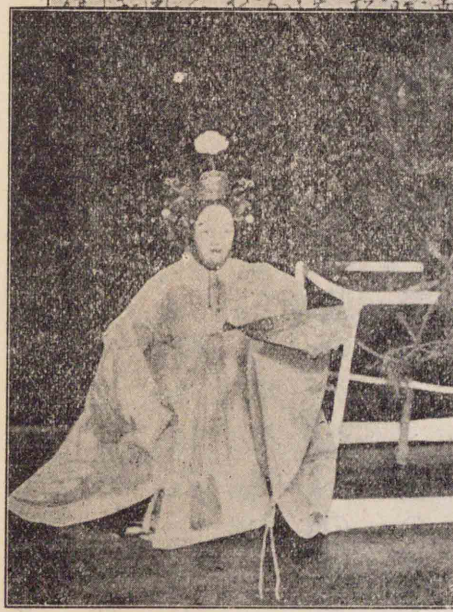
申さうずる。

ワキ詞いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候
 程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞あら嬉しや。こな
 たへ賜はり候へ。ワキ詞しばらく。承り及びたる天人の舞
 樂、唯今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠嬉し
 や、さては天上に還らん事を得たり。此のよろこびにこて
 もさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あ
 り。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さり
 ながら、衣なくては叶ふまじ。さりこてはまづ返し給へ。
ワキ詞いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで其の儘に、天にや
 あがり給ふべき。シテ詞いや、疑は人間にあり。天に偽なき
 ものを。ワキ謠あらはづかしや。さらばこて、羽衣を返し與

ふれば、シテ謠、少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

羽衣

神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりも無け



能と本謠の衣羽

天といつば
二神
伊弉諾、伊弉册の二尊
十方
東西南北乾坤
巽長上下

神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりも無け

ワキ謠、天の羽衣風に和し、シテ謠、雨に濕ふ花の袖、ワキ詞、一曲をかんで、シテ謠「舞ふごかや。地謠、東遊の駿河舞、此の時や始なるらん。クリ地謠、それ久かたの天、といつば二

ればこて、久かたの空は名づけたり。シテ、サシ謠、然るに、月

宮殿の有様、玉斧の修理、こしなへにして、地謠、白衣、黒衣の

天人の、數を三五に分つて、一月夜々のあま少女、奉仕を定め

役をなす。シテ謠、我も數ある天少女、地謠、月のかつらの身を

わけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲ごかや。クセ、春霞

たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲く。げに花かづ

ら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙な

り天津風、雲の通ひち吹閉ちよ。少女の姿しはしこゝまり

て、此の松原の春の色を三保が崎、月清見瀾、富士の雪、いづれ

や春の曙。たぐひ浪も、松風も、長閑なる浦の有様。其の上、

天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ

春霞
春霞たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲くらん(紀貫之)

天津風
僧正通、昭の歌、五句「とどめん」

君が代は
君が代は天の
羽衣まれにき
つぎぬ巖なる
らん(拾遺集
讀人不知)

日の本や。シテ謠君が代は、天の羽衣まれにきて、地謠、撫づこも盡きぬ巖ぞこ、聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の笙笛シヤウチヤク琴、笙、篋、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠、南無歸命月天子、本地大勢至。地謠、東遊の舞の曲、シテワキ謠あるひは天つみ空の緑の衣、地、又は春立つ霞の衣、シテ色香も妙なり少女の裳裾、地謠、左右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地謠「東遊の數々に、其の名も月の宮人は、三五夜中の空に又、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土に之を施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣

あしたか山
愛鷹山

浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。(觀世流謠曲)

私が謠曲に於て見出す最深第一の興味は、室町時代の精神を、活々と表はしてゐる趣である。私の考へる所では、室町時代の中心趣味は、平安朝趣味と鎌倉時代趣味とを調和した處にある。平安朝は優美本位で、華やかなれ、美しかれと願つた時代、鎌倉期は之に反して剛強なれ、實なれと願つた時代であるが、室町時代は此の二つの趣味を捏ね合はして、華美なる中に樸實の匂があり、樸實なる裡に華麗なる光の潜んで居る趣味―いはば華麗を簡樸で統べ、簡樸に華麗を含めたともいふべき一種の新趣味を成立させた。謠曲が古文學の名文句を無數に取り入れて居りながら、其の間に一種のさびた、曇つた、物しづかな、神祕的な趣の籠つて居るのは、此の趣味の表はれた最も著しい一面であると思は

鏡板
舞臺の後に張
り附けたる板。

木食式
木食は木の實
を食ひて生活
する僧。超俗
枯淡なるをい
ふ。

れる。

此の味ひは謠曲の實演せられる能を見れば、一層明かになる。能舞臺に入つて、まづ目につくのは正面の鏡板に畫かれた一本の老松。千年の苔に、さびて大地に据わり込んだやうな神々しき老松である。あの老松は、天地山川、風水月露、雨雪雷電、花鳥木石等のあらゆる自然現象、老若男女、貴賤貧富、平和鬭争、喜怒哀樂、愛惡欲等のあらゆる人事の背景として用ひられ、その寂びた静かな風趣を以て、善惡美醜、莊嚴滑稽、あらゆる所を統べてゐる。役者の謠ひぶり舞ひぶりは、例のさびた落ちついた、底力のある聲や曲や所作をもつて一貫して居る。悲しい事も嬉しい事も、華やかな事も、淋しい事も、可笑しい事も、恐ろしい事も、若い者の事も、年寄の事も、男の事も、女の事も、天女の事も、鬼神の事も、散歩も、駈足も、すべてさび色の同一色、曇つた苔の生えた底力のある聲であらはず。「春霞たなびきにけり久方の、月の桂の花や咲く」といふが如き華やかなる文句をば、鶯のやうな美しい聲で謠ふのかと思へば、何の矢張ドホラ〜の老人聲、仙人聲、木食式もじきの聲である。「松風や、大原御幸の

松風
須磨の浦の海
人、松風、村雨
といふ二女の
事蹟を脚色せ
る謠曲。

大原御幸
平家物語の大
原御幸を脚色
せる謠曲。

倉田百三
廣島縣の人、
文學者。

やうな優婉な曲も、業平も、小町も、天女も、花の精も、その通りである。泣くには手の目を離るゝこと二三寸、能の用語に、悲しんで俯く様を「曇る」といひ、泣く事を「しをる」とはよく云つたもので、いかにもよく能の特色を説明してゐる。音楽はといふと、大鼓・小鼓・太鼓・笛のドン〜ビイビイ、叩き聲ひしぎ聲の餘韻のないもの。地謠はといふと、シテ・ワキ・ツレの甲高かたかになり易いのを、抑へ〜鎮め〜て行く。面はあの通りの濫い艶を消した神祕的のもので、しかも名人の能役者の顔は面の様になるとさへ云つてある。華麗に憧れて簡易に安住した室町時代の武士の心持は、此の中に毫末の遺憾もなく表はされて居るではあるまいか。能の興味は謠曲の興味である。私は、謠曲文學の第一の面白味は、この時代趣味の表はれといふ點にあると思ふ。(謠曲文學第一の興味―五十嵐力)

一二 人格の表出

倉田百三

我々の感情や意志の表出は、我々の人格が如何なるものである

標幟
標章

かを、直接に他人に印象せしめる機會である。我々の内面生活は、自然に肉體的表出を求めようとする衝動をもつものである。しかしながら、我々が他人に對してこの表出を印象しようとする欲し、或は自然に印象すべき位置に置かれた時、その表出の仕方は、對人關係の道德によつて制約されなければならない。表出の仕方が自由であり、自然であり、その場所と時とにふさはしい、即ち禮に適ふか否かは、我々の教養の程度を示す標幟であるが、自分はここでは、特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない、即ち我々が人格の尊威を傷つけるやうな表出の仕方をのみ選んで擧げる。

我々の内面の状態が、即ち表出されるころのものが、卑しむべきものである時、その自然な表出が卑しむべき印象を與へることは言ふまでもない。しかし我々の内面の状態が卑しむべきものでなくとも、その表出の仕方が人格の尊威を傷つけるやうなもの

窺ふ
伺ふ



である時には、それはなほ卑しむべきものとなる。例へば、我々が飢を感じることは自然である。しかし、我々が、かの犬の如くにその飢を露骨に表はしても、もの欲しさうな眼付をして他人の食膳を窺ふならば、それは自己の人格の尊威を保ち得ないものとして、卑しまれねばならない。隣人の愛に

飢ゑた時に於ても、その人間らしい
孤獨の寂しさや飢渴をも、餘りに哀
願的に相手と時と場所とに對する
考慮を費す餘裕なく表出すること
は、人格の尊威を傷つけないではお

かない。

すべて他人の感情に訴へ過ぎる、女々しく、未練がましく、愚痴っぽい表出は、高貴の徳と一致しないものである。決して自己の内

窘窮
窘束

Stoic
ストイック

面の現實を他人に隠蔽することがよいといふのではない。自己の苦痛や悲哀に堪へ得ることが、人格の尊威を構成する重要な力だからである。我々が他人に向つて苦痛や悲哀を訴へることは、却つて彼等の苦痛や悲哀の原因となり、これに對する同情と奉仕との義務を負はせることになる。しかも多くの人々は、自己の無力や、運命の不可抗力や、己自らの不幸の爲に我々の愁訴を容れる餘裕のない場合が少なく、そのため彼等を徒らに窘窮せしめるに過ぎない結果となる。これ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出することを、出来る限り抑制しなければならぬ所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關しては、ストイック的な寡黙の方が、高貴の徳と一致する。瘖我慢や負惜しみのやうな不自然さは賞讃すべきものではないが、なほそれは卑しむべき感を與へない。しかし、自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲のよさを

率直
眞率

を棚に上げ、過剰にして亂れた表情を以て泣き訴へることは、人格の威嚴を傷つける。しかもそれが何等の効果なき愚痴の場合に於て尙更である。不可抗な運命を勇ましく負うて忍受することは、人格の尊威と力との靜的な現れとして、尊い感を與へる。單に苦痛や悲哀の表出ばかりでなく、愛や、好意や、怒や、その他すべての感情の表出が過多で軽々しいことは、高貴の徳と一致しない。この點に於ては、自分は西洋風の表出よりも、東洋風の表出を好むものである。殊にかの能樂に於ける表出法は、最も洗煉され、簡素で、しかも効果的である。
素より自分は天真や、率直や、人間らしい隔なさを愛するものである。我々が野原を散歩して、そこに出會つた見知らぬ人に直ちに話しかけたにしても、それを必ずしも間違とは思はない。寧ろかゝる態度の何等のわだかまりなく執れるやうになることを、自

卑しむ
賤しむ

分の理想の境地とするものである。しかし、かゝる態度を高貴の徳に反せずして執り得る爲には、我々の内心が清淨で無礙でなければならぬ。そこに輕々しさ、馴々しさ、ぶしつけの感じが伴ふ限りは、かゝる態度は自他の人格の威嚴を傷つける。我々が理想的人格に達しない限り、我々のこだはりや遠慮は避けることが出来ない。自己の醜さを他人に押しつけて、粗野な手を以て他人のペールを拂ひのけ、泥足を他人の清堂に踏み入れ、他人の心の扉をのぞきこんで、その靜けさを搖ぶるやうなほしいまゝな感情や意志の表出は、他人の心情を尊ばず、自己の人格を重んじないものとして、卑しむべきものである。素より人には様々な個性があり、随つてその感情や意志の表出にも種々な仕方がある。或人は内氣に、或人は無邪氣に、或人は人懐かしく、或人は寡黙である。これ等はそのまゝの特色をもちながら、一つの高貴な人格の現れ

方の種々相として、それ／＼に美しくあり得るものである。すべての人が同じ仕方で表出しなければならぬことはない。またたゞひ種々な缺點はもちながらも、その人格の本質が高貴であるならば、そこに善と美とが十分に現れ得る。

我々が感情や意志の表出に於いて完全な自由を得ることは、我々の人格の完成の最も明らかな表徴である。我々がかの聖衆俱會の繪に於て、祝福された人たちが、互に高貴の徳を具へて、傷つけず傷つけられず交り合ふ天上の挨拶や遊樂の光景を想像する時に、尊い感に打たれるのである。我々の表出には、人間らしさ、超人らしさ、天使らしさなどこの種々な段階がある。より高い階段より見れば、より低い階段に於ける表出は、高貴の徳に於て足りないものである。超人より見れば、人間らしい表出は、甘く、弱く、若しくは哀れに見えるであらう。

聖衆俱會の
繪
極樂淨土また
は天國の圖。

我々は高く登り、遠く願ふに随つて、卑しむべきものの領域を擴張する。すべてのものは自己の境涯にふさはしい表出を求め、であらう。自分がこゝに挙げたのは、人間らしさの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしい表出として、卑みに洩れ得るものは、神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたものと成り得るであらうと信ずるからだ。しかし、我々は天使らしい階段より自己の卑しさを省み得るまで向上することを願はなければならぬ。

(超克)

一三 寺小屋

竹田 出雲

竹田出雲
大阪の人、戯曲作者、實曆六年(約一七〇年前)歿、年六十六。
春藤玄蕃
藤原時平の臣。
首
菅公の子菅秀才(當年八歳)の首。

かゝる所へ春藤玄蕃首見る役は松王丸病苦を助くる駕乗物、門口に昇きすうれば、後には大勢村の者、附き随うて、申上げます。皆是に居る者の子供が、手習に参つて居ります。若し取違へ首討た

松王丸
梅王丸及櫻丸の兄。道真に背いて時平の舎人となる。
村の者
村は大原の奥、芹生の里。

菅丞相
右大臣菅原道真。



れては、取返し成りませぬ。ごうぞおもごし下され。願へば、玄蕃、やあ、喧しい竹蠅蟲めら。うぬらが小悴の事まで、身も田もが知つたことか。勝手次第に連れう田せう。と叱りつくれば、松王丸、やれ、お待ちなされ。暫く。と、駕より出づるも、刀を杖、憚りながら、彼等とても油断ならぬ。病中ながら拙者めが、檢分の役勤むるも、外には菅秀才の顔見知る者なき故、今日の役目しおほすれば、病身の願ひ御暇下さるべしと有難き御意の趣、疎かには致されず。菅丞相の所縁の者、此の村に置くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が悴に仕立て、助けてかへる手も有ること、こりや、やい、百姓めら、ざわざわぬかさずとも、一人づつ呼出せ。面改めてもごしてくりよ。

夫婦 武部源藏と妻戸浪源藏は菅原道真の臣にして書道の秘事を授けらる。

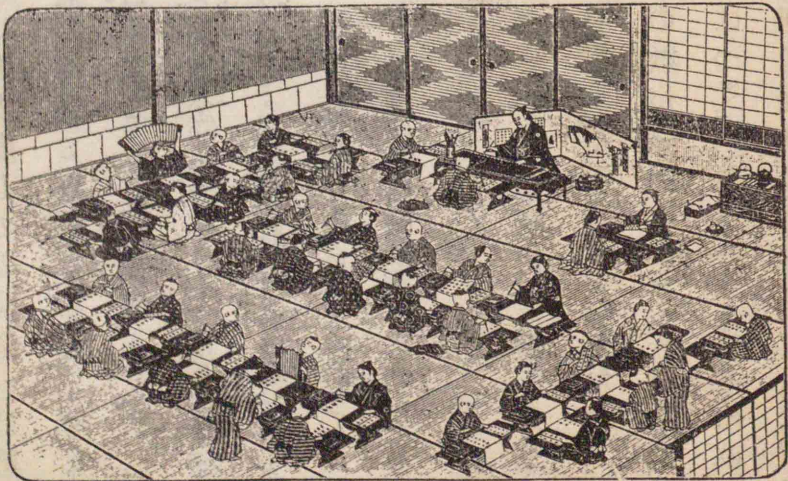
木みしり茄子 木菟茄子、枝より早く采り取りし小茄子。嫁にも云々秋茄子嫁にくはすな。(諺草)

胡亂 胡散

このつ引きさせぬ釘鏝打てばひゞけの内には夫婦豫て覺悟も今更に胸轟かすばかりなり。表はそれとも白髮の親仁門口より聲高に、長松よ〜。と呼出せば、おつと答へて出でくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨、是ではないと赦しやる。「岩松は居ぬか。」と呼ぶ顔に、祖父様何ぢや。とはしこくて、出でくる子供の頑是なき顔は丸顔木みしり茄子。「詮議に及ばぬ、連れうせう。」と睨め付けられ、お、こはや。嫁にもくはさぬ此の孫を、命の花落遁れし。」と祖父が抱へて走り行く。次は十五の漣くり、ぼんよ、ぼんよ。」と親父が手招き、こ、よ、己はもうこ、から抱かれていの。」とあまえる顔は馬顔で、聲蒼。「お、泣くな、抱いてやらう。」と干鯨を、猫なで親が銜へ行く。「私が忤は器量よし。お見違へ下さるな。」と斷りいうて呼出すは、色白々と瓜實顔、此奴胡亂と引つ捕へ、見れば首筋眞黒々、墨か壓かは知らねども、此奴でな

据ゑ

いと突放す。其の外山家奥在所の子供残らず呼び出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産ました計芋、子ばかりよつて立歸る。すは身の上と源藏も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人、やあ源藏、この玄蕃が目の前で、討つて渡すと請合つた菅秀才の首、さあ請取らう。早く渡せ。」と手詰の催促、ちつとも臆せず、かりそめならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず。暫くは御用捨。」と立上るを、松王丸、やあ、其の手



寺小屋

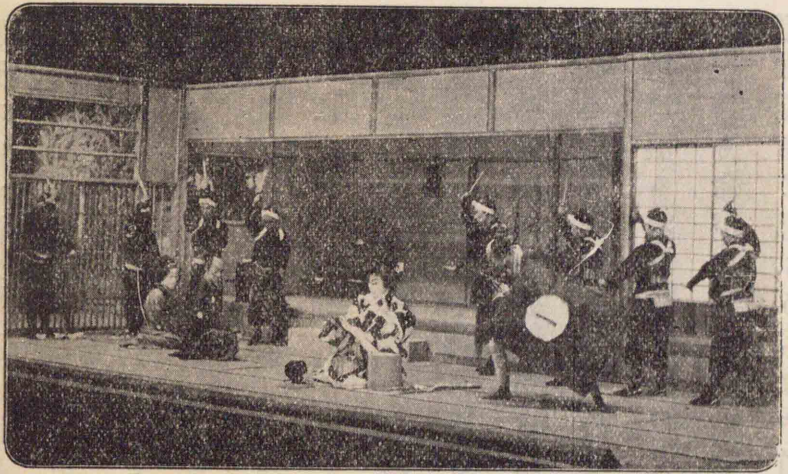
はくはぬ。暫しの用捨と隙とらせ、逃支度しても、裏道へは數百人をつけ置き、蟻の這出る所もない。生顔と死顔は、相格さうかくが變るなご、身替りの贗首、犬もたべぬ。古手ふるてなことして後悔すな。こいはれてぐつとせき上げ、やあ、いらざる馬鹿念ばかねん。病みほうけた汝なんぢが目玉がでんぐり返り、逆様眼さかさまめで見ようはしらず、紛れもなき菅秀才の首追つ付け見せう。「お、其の舌の根の乾かぬ内に、早く討て。こく切れ。」と、立蕃が權柄。はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。

檢使
春藤立蕃

傍そばに聞き居る女房は、こゝぞ大事と心も空、檢使は四方八方に眼を配る中にも、松王机文庫の數を見廻し、やあ、合點の行かぬ。先だつていんだ小倅等は以上八人、机の數が一脚多い。其の倅は何處に居るぞ。と見咎められて、戸浪ははつと、「いや、こりや、けふ始めて寺、いや寺参りした子がござんす。」何馬鹿な。「お、それく、是が即ち

菅秀才のお机文庫。」と、木地を隠した塗机、さつとさばいて言ひ抜ける。「何にもせよ、隙とらす油斷の元。」と、立蕃諸共つゝ立上る。こなたは手詰、命の瀬戸際、奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、ふん込む足もけしとむうち、武部源藏白臺に、首桶載せてしづしづ出で、目通りにさし置き、是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る。いはば大切な御首、性根をすゑて、さあ松王丸、しつかり檢分せよ。」と忍びの鰐元くつろげて、虚といはば切りつけん、實と云はゞ助けん、固唾を呑んで控へ居る。「は、は、は、何のこれしき、性根ごころか。今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取巻きめされ。」と、畏まつた。と、捕手の人數、十手振つて立蒐たちかる。女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命、さあ實檢せよ、檢分。こいふ一言も命がけ、後は捕手、向ふは曲者、立蕃は始終眼を配り、こゝぞ絶対絶命と思ふうち、はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、贗と

一生懸命
一所懸命



劇の寺小屋

いうたら一討とはや抜きかける。戸浪は祈願、天道様、佛神様、憐れみ給へ。女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、むう、こりや菅秀才の首討つたは紛ひなし、相違なし。いふにも、源藏夫婦、傍りきよろ、見合はせたり。檢使の玄蕃は、檢分の詞證據に、出かした、出かした、よく討つた。褒美にはかくまうた罪科赦してくれる。いざ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん。いか様隙取つてはお咎めもいか

が、拙者は是よりお暇賜はり病氣保養致したし。お、役目は濟んだ。勝手にせよ。首請取り、玄蕃は館へ、松王は駕にゆられて立歸る。

若君
菅秀才。

嬉しうて

夫婦は門の戸びつしやり締め、物もえ言はず青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出すばかりなり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、あゝ有り難や、かたじけなや。凡人ならぬわが君の御聖徳が顯れて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所。御壽命は萬々年、悦べ、女房、「いや、もう、大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが目の玉へ、菅丞相様がはいつてござつたか、但しは首が黄金佛ではなかつたか。似たと言つても瓦と黄金。寶の花の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる。はあ有り難や、尊や。悦び勇む折柄に、小太郎が母いきせきと、迎へて見えて門の戸叩き、寺入の子の母でござんす。今漸う歸りまし

言うた

た。言ふ聲聞くより又びつくり、一つ遁れて又一つ、こりやまあ何
 と、どうせう。妻が騒げど夫は胴据ゑ、こりや、最前言うたは爰の事。
 若君には替へられぬ。うろたへ者。戸浪を引退け、門の戸ぐわら
 りと引明くれば、女は會釋し、これは、まあ、お師匠様でござりま
 すか。悪さをお頼み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であるに。
 と言ふを幸ひ、いや、奥に子供と遊んで居ます。連立つて歸られよ。
 と眞顔で言へば、お、そんなら連れて歸りましよ。と、ずつと通るを
 後より、たゞ一討と斬付くる。女もしれ者、ひつぱづし、逃げても逃
 がさぬ源藏が、刃するぞく斬付くるを、わが子の文庫ではつしと受
 止め、これ待つた、待たんせ。こりや、どうぢや。と撥ねる刃も容赦な
 く、また斬付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛
 の六字の幡、顯れ出でしは、こは如何にと、不思議の思に劔もなまり、
 進みかねてぞ見えにける。

梅は飛び
この淨瑠璃に
 ては菅原道真
 の作とせり
 無論假作な
 り。

兄弟三人
松王、梅王、櫻
 丸、梅王は追
 眞に、櫻丸は
 齊世親王に仕
 ぶ。

小太郎が母涙ながら、若君菅秀才のお身がはり、お役に立てて下
 さつたか。まだか。様子が聞きたい。と言ふに、びつくりして、
 それは得心か。「得心なりやこそ、この經帷子、六字の幡。」うむ、して、
 その許は何人の御内證。と尋ぬる内に、門口より、梅は飛び、櫻は枯る
 る世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に立
 つたぞ。と、聞くより、わつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ、未
 練者め。と、呵りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度びつ
 くり、夢か現か、夫婦か。と、あきれて詞もなかりしが、武部源藏威儀を
 正し、一禮は先づ後の事。これまで敵と思ひし松王、打つて變つた
 所存は如何に。いぶかしさよ。と尋ぬれば、お、御不審もつこも。
 存じの通り、我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公。情なや、この松王
 は時平公に従ひ、親兄弟も肉縁切り、御恩を受けた丞相様へ敵對。
 主命とは言ひながら、皆これこの身の因果。何とぞ主従の縁切ら

追うた

んご、作病構へ暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんご今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども、身がはりに立つべき一子なくば如何せん。こゝぞ御恩を報ずる時ご、女房千代と言ひあはせ、二人の中の悴をば、先へ廻してこの身がはり。机の敷を改めしも、わが子は來たかご心のめぐ。菅丞相には、わが性根を見込み給ひ、何ごて松のつれなからうぞこの御歌を、松はつれない、つれないご、世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ、源藏殿。悴がなくなば何時までも、人でなしと言はれんに、持つべきものは子なるぞや。と言ふに女房なほせき上げ、草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ。持つべきものは子なるごは、あの子が爲に好い手向。思へば最前別れた時、何時にない跡追うたを、呵つた時のその悲しさ。冥途の旅へ寺入ごは、や蟲が知らせたか。隣村へ行くと言うて、道まで往んで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、ごうまあ家

死ぬる子は
死にし子顔よ
かりき(土佐
日記)

最期
最後

へ往なるゝものぞ。死顔なりごも今一度見たさに、未練ご笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香奠。四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすごいふ、悲しい事が世にあらうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は容貌よしご、美しう生れたが、かはいや、その身の不仕合せ。何の因果に疮瘡まで、しまうた事ぢや。ごせき上げて、かつばご伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り、最前にな、連合の身がはりご思ひ付いた側へ往て、「お師匠様、今から頼み上げます。」と言うた時のこと思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理。ご涙添ふれば、松王丸、いや、これ、御内證。こりや、女房も何で吠える。覺悟した御身がはり、内で存分ほえたでないが。御夫婦の手前もある。いや、なに、源藏殿、申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう。「いや、若君菅秀才の御身がはりごいひ聞かせたれ

ば、潔う首さし延べ。「あの逃げ隠れも致さずにな。」につこり笑うて。「むゝゝゝ、出かし居りました。利口な奴、立派な奴。健氣な八つや九つで、親にかはつて恩おくり、お役に立つは孝行者、手柄者ご思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、さぞ草葉の蔭よりも羨しかる、けなりかる。俸が事を思ふにつけ、思ひ出さる、出さるゝ。」と、さすが同腹同性を忘れかねたる悲歎の涙。千代「なう、その伯父御に小太郎が逢ひますわいの。」と取付いて、わつとばかりに泣沈む。

歎も洩れて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに。かはいの者や。」と御袖をしぼり給へば、夫婦ははつと、ともに浸せる有りがた涙。「序ながら、若君様へ御土産。」と松王つつ立ち、申し付けた用意の乗物、早く〜。」と呼ばはるにぞ、はつと答へて家來共、御目通りに鼻き据うる。「はや御出で。」
据うる

北嵯峨
今京都府葛野
郡嵯峨町。

河内の國
河内國土師
村、菅丞相の
伯母覺壽の居
村。
姫君
菅原道真の
女、刈屋姫の
上記土師村に
隠る。

と戸を開けば、菅丞相の御臺所。「なう母様か。」わが子か。」と御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、方々ご御ゆくへ尋ねしに、いづくにか御座なされし。」松王「されば〜、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕りに向ふご聞き、それがし山伏の姿となり、危いごころを奪ひ取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。こりや、こりや、女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野邊のおくりを營まん。」あい。」と返事のそのうちに、戸浪が心得、抱いて來る、死骸を綱代の乗物へ、乗せて夫婦が上着を取れば、あはれや内より覺悟の用意、下に白無垢、麻上下。心を察して源藏夫婦、野邊の送、に親の身で、子を送る法はなし。われ〜、夫婦が代らん。」と立寄れば、松王丸「いや〜、これはわが子にあらず。菅秀才の亡骸を、御供申す。いづれもは門火、門火。」と門火を頼み、頼まるゝ、御臺、若君もろごもに、しやくり上げたる御涙。冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀

鳥邊野
古來京都の墓地火葬地として名高き處。今の京都市五条坂邊六道の東南。

十返舎一九

一本名重田貞一駿府の人、徳川末期の戯作者、天保二年前(約九〇年)歿、年五十七。
鹽井川
靜岡縣(遠江)の東部、掛川の附近。

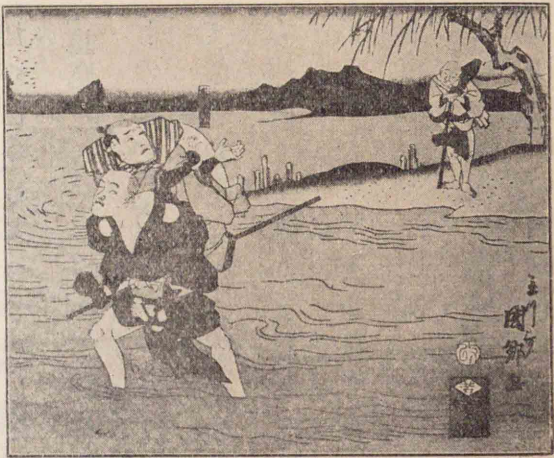
佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書く子はあへなくも、散りぬるいのち是非もなや。明日の夜たれか添乳せん、らむ憂いめ見る親心、劔と死出の山けふこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず。京は故郷と立ちわかれ、鳥邊野さして連れかへる。(菅原傳授手習鑑)

一四 膝栗毛

十返舎一九

鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくり上げてこゝを渡るに、彌次郎北八も、いざや引連れ渡りなんとする折柄、京のぼりの座頭二人連、此の川の歩渡なるを聞きけるにや、一人の座頭、犬市もし、川は膝ぎりもござりますかな。北八さやう、しかし水が早いからおめい方あ、あぶない。用心して渡んなせえ。犬市はて、成程水の

さん・なあ。むめりやん。ごうさいく。この二語、拳を打つ呼聲。さん(三)なあ(感)むめ(五)りやん(二)ごう(五)さい(感)



座頭の川の渡り(國郷筆)

音がよつぽど早い。犬市いひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投込んで考へ、犬市いや、こゝらがごうか浅いやうだ。こりや猿市、二人ながら脚絆をこるも面倒だ。お主若役におれをおぶつて渡れ。猿市は、ずるい事をぬかす。拳でまゐらう。何でも負けた者がおぶつて渡るのだ、よしか。犬市こりや面白い。さあこい、さんな

あむめで。猿市りやん、ごうさいく。ご片手拳をうちながら、兩方から左の手を出した。互に拳をうつ手を握り合ひ、犬市さあ勝つたぞ勝つたぞ。猿市え、いまくしい。そんならこの風呂敷包を貴様一所にしよはつせえ。それよしか。さあ来い。ご支度して

背中を向ける。彌次郎、これは有難い、猿市におぶされれば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはいり、難なく向うへ渡ると、こなたの岸に残りたる犬市、やい猿よ、どうする。早く川を渡さぬか。」猿市向うの岸にて聞きつけ、腹を立て、こりやじようだんな奴だ。たつた今おぶつて渡したに、又そつちへ行つて俺をなぶるな。」犬市「馬鹿いへ。おのればかり渡つて太い奴だ。」猿市「いや太いとはそつちの事だ。」犬市「こりや、おのれ兄弟子に向つて、言語道斷な。早く來て渡さぬか。」と、白い眼をむき出し、腹立つる故、猿市仕方なく、又こちらへ渡りて歸り、「さあ、そんならおぶさりなさろ。」と、背中を出す。北八しめたこ手をかけておぶされれば、猿市またさつさと川へはいる。犬市は大きにせきこみ、これ、猿市どこにある。」猿市川中にて、「いや、こいつは誰だ。」と、北八を川の中へごんぶりおこす。北八「おい助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をもがき流る、ゆる、彌次郎飛込み引上げ

東海道中膝栗毛

八卷、十返舎
一八の彌次郎北
戸の彌次郎東
海道を旅行す
るさまを、滑
稽的に敘した
るもの

高山樗牛

名は林次郎、
樗牛と號す、
文學博士、明
治三十五年歿

平家の都落

壽永二年七
月

南都の餘燼
治承四年二月
平重衡、奈良
法師を攻めて
其の寺を燒

れば、頭から骨までくさるほど濡れ、北八「え、座頭めが、ごんだ目にあはしあがつた。」彌次「は、まづ着物を脱ぎやれ、しぼつてやらう。」北八「全體彌次さんがわるい。何のおぶさらずともい、ここに、お前が手本を出したから、つい俺も、」彌次「川へはまつたか。氣の毒な。は、ま、ま、ま、それで一句やらかした。

はまよりけり眼のなき人を侮りて

むくいはいは早き川のながれに (東海道中膝栗毛)

一五 平家雜感

高山樗牛

一 都落

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにもまた目覺しきはなかるべし。南都の餘燼い

墨股の勝鬨
壽永元年三月
平知盛等、源
氏を美濃の墨
股川に破る。

木曾
壽永二年七月
木曾義仲、叡
山に據る。

三吉野の
三吉野の山の
あなたに宿も
あなごのうき
時のかくれが
にせん(古今
集)

まだ冷めず、墨股の勝鬨なほ響
きぬるに、信越俄かに雲亂れて、
木曾の五萬騎はや比叡のあな
たに充ち満ちぬ。宇治淀の備
もろくも潰えて、都も今を限ご
ぞ見えける。あはれ、一門の天
下身を置くに處なし。世はか
く憂きを、三吉野の山のあなた
にもかくれがは無きか。いざ
さらば己みなん。都の中にて
いかにもならんよりは、西國の

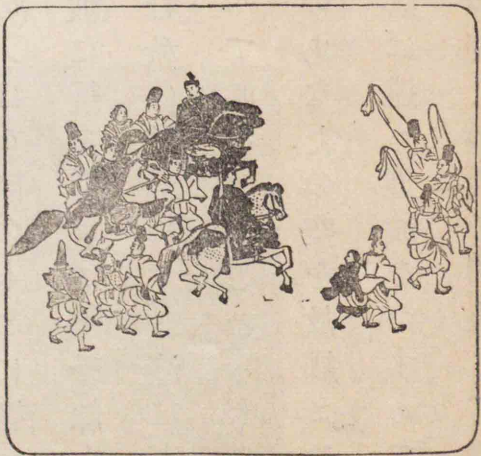


平家の都落

一炬の煙
楚人一炬、可
憐焦土。(杜
牧、阿房宮賦)

燒野の原
故郷を燒野の
原とかへりみ
て、末も煙の波
路をぞゆく
(平經盛)

行幸に御供して、一旦の凌辱を
忍ばまし。あはれ生死も知ら
ぬこの別路、再び歸り來べき都
ならねばこそ、六波羅池殿西八
條以下、一門譜第の邸宅宿房、京
白川の四五萬家を併せて、一炬
の煙ごなし果てぬることあわ
たゞしかりしか。



(春日權現靈驗記繪詞)

こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々かなしむ。保
元このかた、天下の榮華を盡したる花の都を、燒野の原ご顧
みて、末は煙の浪、雲の浪、行方も知らずさすらふらん。直衣。

翠華搖々云々
白樂天の長恨歌の句。

笛吹く人
壽永二年十月
平清經、月夜
從容笛を吹い
て海に投ず。

束帶の身にも、今は黒金の衣を著けたれど、詠歌の餘哀に狂れて、弓矢の響を勵まん心地せず。さても棄て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしおぼるゝ昔の様の夢に入るをば如何にかせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る處に野に満てり。嗚呼きのふは東關のもごに轡をならべて十萬餘騎、げふは西海の波に纜を解きて七千餘人。行方の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷ましむるもののみなり。月の出でくる山の端のあなたの空を故郷さや、日暮、舳に立ちて笛吹く人あり。響は遠く煙波をかすめて、三軍ひこしく耳を敲つ。嗚呼この時この人の懐、果して如何。

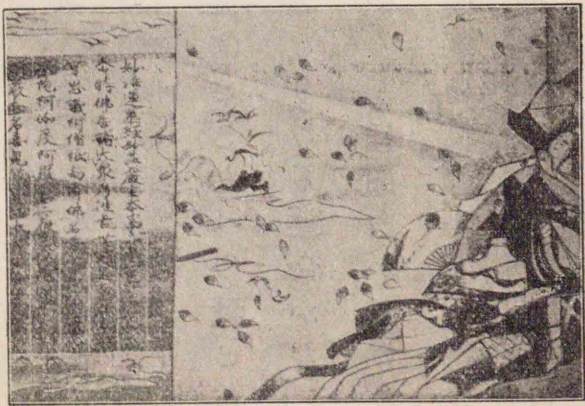
二 清盛入道

とぞいふめる

荒ばんずる

嚴島經卷
清盛以下平家
一門の人々が
書き寫して嚴
島神社に納め
たるもの、艶麗
なる装飾の平
家一代の豪華
を想はしむる
に足る。

世にもあはれなるは、平家とぞいふめる。げに、この一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及び難きなり。案ずれば一旦の榮華に耽りて、百年の計をおもはず。今や秋の嵐の吹き荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほおぼろにして、覺めての後は、さすがにうき世と觀ずれども、先世後代、既に梭をかへたるを如何にかすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ、かへす



嚴島經卷

一題の遺詠
忠度の故事。
己身の現在
維盛の故事。

入道相國
平清盛。

がへすも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛に絆されては、己身の現在に來世の果報を思はず。あはれは桐の一葉に散りそめて、世はごこしへの秋こそ見えにける。思へば怪しきまでに哀なりける運命かな。さるにても、入道相國の生涯こそ、なかくに面白かりけれ。

弓矢のいさをしは、はや畢んぬ。朝家の權柄、今はた盛なり。一門、殿上にのぼりて六十餘人、私封、全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗、皆こゝにあつまり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は「この人ならでは人にあらず」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の

京師の長吏
陳鴻の長恨歌
傳の楊氏の勢
力を敘したる
條に、「京師長
吏、爲之側
目。」
嚴島
安藝の嚴島神
社。平氏の尊
信せし所。

城南の離宮
治承三年、後
白河法皇を鳥
羽殿に幽し奉
る。

射山
藐姑射山の
略。
重代の帝座
治承四年、福
原に遷都す。
愛宕の里
平安京をい
ふ。當時の落

長吏これがために目を側つるばかりなり。されば、十善の帝王かしくも外戚の威に壓されたまひて、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島こそ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招き返さんずる勢こそ書かれしも、げにこころいざ覺ゆ。

不敵なる入道は、私門の榮に飽き足らで、世に人もなげに振舞はれけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相雲客流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄かに動き、愛宕の里のあはれをこゝめけるこそ、なかくにあさましかりしか。

首に「百年を四かへりまでに過ぎ來にし愛宕の里の荒れやはてなん」(平家物語)

兩山
叡山延曆寺と奈良の興福寺。

咲きも残らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくともかくてやは已むべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄勻の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつばれ平門隨一の貴公子と見えつれど、富士川の水鳥に算を亂せる十萬餘騎は、いたづらに長き世の笑をこゝめたるに過ぎず。加ふるに北土俄かに雲亂れて、木曾の山氣やうやく都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色をしめしぬ。平家の運命日に益急なり。時しも入道は病にかゝりぬ。あはれ病の床のさびしきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜に憶ひ出でたる時、而し

保平
保元、平治。
ついでし

小松の内府
内大臣平重盛。世に小松殿と稱す。

六慾
眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の慾。

て命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身にあまりて、保平のいさをしまたいふに足らずと思はざりしか。おのれにつらかりける人々を、かくまでに惱ましたるここの罪深しきは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしは、ては軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせつるここの中にも非道の所行なりと思はざりしか。更に小松の内府が身命にかへて、乃父の罪業を救はんごせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづなに、轉た悔恨の心を動かすここのなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發

するここなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、まさにその生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞に曰く、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し彼が首を刎ねてわが墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生、後生の孝養にてはあらんずる。一念の執著に、必衰の運命をものごもせず、三世の因果を身にひくごも、なほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否は姑く措き、ごまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たごひ四海の

今生
前生
後生

報

死して云々

ケロ、その友
スキピオの死
を甲して曰く
「死せりと雖
も猶生くと」

藤原俊成

後白河天皇の
朝、千載集を
撰す。元久元
年、約七二〇
年前、歿、年
九十一。

能因法師

俗名橋永愷、
出家して攝津
の古曾部に住
む。古曾部に入
道ともいふ。
後鳥羽天皇の
頃の人。

波を翻して彼が頭にそゞごも、なほこの一我を如何ごも
するここ能はざらん。六尺の眇軀、こゝに至れば天地の大
にも比ぶべく、運命われに於て浮塵にひごしからん。いは
ゆる死して而して生けるものごいふべきか。(橋牛全集)

一六 井出の玉川

藤原 俊成

駒よりなほ水うらん山吹也

こゝのつゆそふ井出る玉川

能因 法師

山里の春水ゆふぐんきみきむ

入相のつゆに花ぞあけける

源賴政
世に源三位
政といふ治
承四年(約七
四〇年前)歿
年七十三

後京極良經

藤原氏、攝政
太政大臣、建
永元年(約七
二〇年前)歿、
年三十八

藤原定家

俊成の子、
古今集の撰
者

藤原家隆

新古今集の撰
者。嘉祿三年
(約六九〇年
前)歿、年八
十

にけのたはまぶらもかぬふ夕立
そらさうらるく澄ゆる月丸

源 賴政

きりのもけふはもさかたにうらそらさ

後京極良經

こほれる雲吹く阿けかな

藤原 定家

見わさむらも紅きまきうらそら

浦のとまや竹林のゆふぐれ

藤原 家隆

志賀の浦やさざりゆく浪若し

こほりて出づるあけ阿けの月

寂蓮法師

和歌のうらまはれ禁うに眺むさむ

こすまによらるあまれつら

(新古今和歌集)

新古今集

二十卷、後鳥
羽天皇が藤原
定家同家隆等
に仰せて撰せ
しめられしも
の、元久二年
成る、元久二
と並び稱せら
る。

石原正明

尾張の人、國
學者、文政四
年(約一〇〇
十二年前)歿、
年六〇

新古今集のころの歌は、一首の口調をめでたくこゝのふる
こゝを本意として、詞のうへに心をのこして餘韻を深くこめ、
一首のつゞけざま幽玄にして、あらはに淺まなる所なく、なさ
けを深うし、語勢をいたはり、たけ高くも、しめやかに、つよく
も、やはらかに、百般の姿あり。たゞ、しをくくたくくこす
るを嫌ひて、詩人のいはゆる雄偉流暢豪壯新奇といふしらべ
を常にはおもひためり。(新古今集時代の歌―石原正明)

金槐集
源實朝の歌集。

尾山篤二郎
金澤市の人、歌人。

百人一首

藤原定家が百人の歌人の名歌一首づゝ選したるもの、小倉百人一首。

世の中は

世の中は常にもがもな落こぐあまの小舟の欄手かなし(實朝)

眞淵

賀茂眞淵、縣居と號す、徳川時代の國學の大家。

人麿

柿本人麿、奈良朝の歌人。



一七 金槐集の歌を評す 尾山篤二郎

武士の矢なみつくろふこての上に霰たばしる
那須のしの原

これは昔から實朝の代表的の作として人口に膾炙してゐる。百人一首の「世の中は常にもがもな」の歌の作者は誰であつたか忘れてゐても、實朝の實歌といへば「霰たばしる」か「直ぐ誰もが」いふほど有名である。眞淵も「軍に立ちて負征矢のみだれをなほすこて肩の上にやりたる其の小手を、霰の打ちたばしらんさま、人麿のよめらん勢

大雪の
高市皇子の薨去を悲める長歌の句、

那須野

栃木縣(下野)那須郡の平原。

箱根路を

箱根の山を打田で見れば、浪のよる小島あり。此の海の名は知るやと尋ねしかば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて。(詞書)

なり。かつ「篠原」といはれしも、はなれてならぬちなみなり。」と褒めてゐる。この歌は無論「霰」といふ題詠である。實朝は霰といふ題から先づ連想したのは、矢石の勢を雨霰と形容することであつたらう。人麿はこれを「大雪の亂れて來れ」といつてゐる。そして其處から一個の武者が背に負うた胡籬の矢並を正しうしてゐるのを眼前に彷彿させて、斯く歌ふに至つたのであらう。次に那須野であるが、これは建久四年の夏、父の頼朝が那須野で大規模の狩獵をやつたところがあるので据ゑたのであらう。眞淵の褒めたのも主としてこの歌の調べにある。調べは急速である。急速であるからいかにも霰を歌つたやうに思はれる。そこがよいといふのであらう。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に
波のよる見ゆ

箱根権現
箱根山にあり、古昔、修験者の道場たり、今箱根神社といふ。

あふ坂
逢坂、山城近江の境、大津市の南。この歌、よみ人知らず。

箱根権現に詣でて、それから伊豆山権現に詣でる、その道で詠んだのである。遙かに見える海は、あれは、この邊だらうと従者に聞いたのである。すると、やはり伊豆の海だと答へたのである。「沖の小島は、島が見えた」とすれば、あの邊には熱海の先にある初島より他にないから、それを指したのだと云はれてゐる。眞淵は「かくまでは、いかでよみ給ふらん」とめでらるゝめり。萬葉の「あふ坂を打ち出て見れば近江の海しらゆふ花に波たちわたる」とあるをもてよみ給ひけん、それよりもまされり」と褒めてゐる。文句なしである。いかにも征夷大將軍らしく堂々として立派である。斯様に大きく擱んで、而も氣息を張り格調を整へて歌ふことは、せち辛い末世の歌人などの及びもよらぬことである。

大海の磯もごころによる浪のわれてくだけて
さけて散るかも

荒磯を震撼してごころに打寄せてゐる大海の波、見てゐるうちにその波濤の裾は割れ、かつ砕け、かつ裂けて、飛沫は高く飛び散つてゐる、ごいふのが、その大意である。さて此の歌の中に母音が幾つあり、子音が幾つあるとか、此の音と此の音との節調がどうであるとか、そんな面倒臭いことは考へて居れない。また波の状態を寫生して、その寫生が本道に入つてゐるからいゝなごご云ふのも、私は嫌ひである。それではごういふ風に此の歌がいゝかごいふに、唯いゝのである、無闇ごいゝのである、ずばぬけていゝのである。「箱根路を」の歌は大きく擱んで來て、而も的確に詠んでゐるのであるが、眼ご心ごが定れば、或は偶然にこれ位の歌が得られぬものでもなからう。だが此の歌に至ると最早偶然ではない。飽く迄も事象に即した物の觀方言ひ方をしてゐながら、これだけの距離を置いた表はし方をするには、餘程その時の心境が明かでなくては

ならない。此の歌は明かであるその上に、熱を帯びてゐる。結果からいへば「箱根路を」の歌と兄たり難く弟たり難いものであるが、作歌の場合のむづかしさからいへば、此の歌は數等上である。

山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心
我あらめやも

この歌は萬葉の「海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ。」と比肩すべき信念であるが、殊に武將としての彼の信念表示を、如何に力強く打出してゐるかを觀るべきである。

ときによりすぐれば民のなげきなり八大龍王
雨やめたまへ

子規は「かくの如く勢強き恐ろしき歌は又と有之間敷、八大龍王を叱咤する所龍王も懾伏致すべき勢現れ申候。『八大龍王』と八音

海ゆかば
大伴家持の
賀陸奥國
出金詔書
歌の中に引
きたる歌。

ときにより

建曆元年七月
洪水漫天、民
愁歎せんこと
をおもひて、
一人奉り、向
念(詞書)祈

八大龍王

難陀、故難陀、
沙場羅、等八體
の龍神。

子規

正岡子規、名
は常規、明治
佛壇歌壇の大
家。

傳教大師

名は最澄、天
台山延暦寺の
開祖、弘仁十
三年(約一十一
〇年)前寂。
五年(六六)の
比叡山中書こ
の歌、詞書に
「建立の時」と
あり。

の漢語を用ひたる所、「雨やめたまへ」と四三の調を用ひたる所、皆此の歌の勢を強めたる所にて候。初め三句は極めて拙き句なれども、其の一直線に言ひ下して強き所、却つて眞率儻なきを示して、祈晴の歌などには適當致居り候。と、いうてゐる。この歌は成程佛神を叱咤したやうに見えぬことはない。蓋し眞言の祈禱が大聲疾呼の暴力的なものであることを思ふと、祈禱は腹の筋力體力でやるものとなつてゐるやうである。耶蘇教の祈禱とは違ふ。そこでこの歌にも自ら腹力が籠つたのであらう。そしていゝ歌だとは思ふが、私には子規のやうに恐ろしい歌といふやうな氣はしない。この歌の結句は新古今の傳教大師の「阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ」の調子を學んだものであらう。ごうも「何々し給へなごといふと、我々はすぐ書生流の日

常語を想起していかぬ。この時代の「給へ」は、もつと嚴重な「給へ」である。(新釋源實朝歌集)

金 槐 正
集 子 正
讀 規

試みに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼のなく聲さこゆ
人麿の後の歌よみは誰かあらん征夷大將軍源の實朝
二十餘り八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬ我は

一八 松下村塾

徳富蘇峰

吉田松陰は天成の鼓吹者なり。感激者なり。彼自ら己を空しうして、他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、又他をして、覺えず自己の精神意氣に同化せしむるを禁ずる能はざらしむる力を有す。これ彼が教育家としての特

徳富蘇峰
熊本の人、名は猪一郎、

松下村塾
長門萩城下、松下村に在り。

下田の獄に
安政元年三月二十五日

色なり。其の踏海の策破れて下田の獄に繋がる、や、獄卒に説くに、自國を尊び外國を卑しむ綱常を重んじ彝倫を敍



吉田松陰と其筆蹟

三分出處皆諸島已矣夫一身入洛可謂能分在哉
心師貫焉而無素立名志仰曾遊之釋難才
讀書無功可操筆三十年賦賦夫計可極氣廿一四
人機狂頑可辨黨衆不容身許家國可死生存久濟
至誠不動分自方未之有人匪立志可聖賢敢進信
已未五月有聞在之毛時將統源復歸難期余
因以永訣若誠大傑使浦無窮首若像若自賞之願
無窮如若者宜將寫吾貌而已哉況若之自賞乎諸
友其深藏之若御磁布以備乃有上色也
二十一年四月猛士蘇峰撰共書

三島
靜岡縣田方郡三島町

つべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。其の下田より檻輿江戸に赴き、途三島を経るや、警護の下人に向ひ大義を説き、人獸相距る遠からざる彼等をして、憤勵の氣、色に

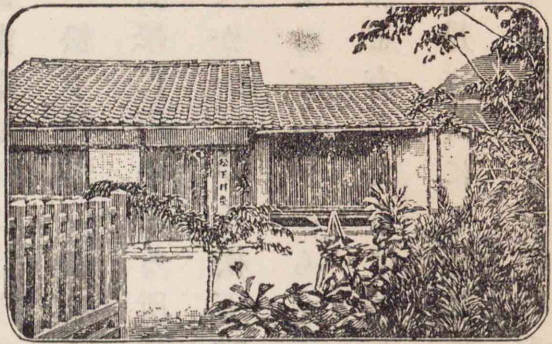
野山の獄
萩城外なる藩
の獄。安政元
年十月のこ
と。

現れしめたり。其の江戸の獄に在るや、いふまでも無し。後送られて長門野山の獄に投ぜらるゝや、其の感化は同囚者に及び獄卒に及び、遂に其の司獄者までも彼が門人となるに至らしめたり。彼が在る所、四圍みな彼が如き人を生ず。これ何に由りて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふに非ずや。

而して彼が最も其の鼓吹者たり、感激者たる特質を顯したるは松下村塾に於て之を見る。松下村塾は徳川政府顛覆の卵を孵化したる保育場の一たり。維新改革の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふなかれ、其の火、燐よりも微に、卵、豆よりも小なり。赤間關の砲臺は粉にすべし。奇兵

奇兵隊
文久六年、高
杉晋作等の組
織せる勤王の
一隊。

山鹿流
山鹿素行の創
始せる兵學。



松 下 村 塾

隊の名は滅すべし。然れども松下村塾に至りては、獨り當時に偉大なる結果を遺せるのみならず、流風遺韻、今に及んで、なほ人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて、家に蟄居せしめられたり。而して其の安政三年七月に至つては、蟄居中、更に家學を授くる許を得たり。其の名義とする所は山鹿流軍學なり。雖も、其の實は然らず。彼は改革家なり。

其の教ふる所は改革の精神なり。其の講ずる所は改革の偉業なり。

玉本文之進
父方の叔父、
即ち貴父の
弟、養父の兄。

松下村塾の名は、其の叔父玉本文之進等が相接して其の村學に用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人がいはゆる松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。蓋し松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅かに安政三年の七月より安政五年の十二月までにして、即ち其の歲月は二年有半に過ぎず。而してこの二年有半の歲月が、未來に於ける日本歴史に千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。彼は何を以てかくの如き大感化を及ぼしたるか。曰く其の人に在り、曰く其の時

白鹿洞先生
宋の朱熹をい
ふ。白鹿洞は
廬山五老峰下
に在り。

橄欖林の夫
子
希臘の哲人ッ
クラテス。

感在知己
士爲知己
者死(史記)
人生感意氣
(唐詩選、魏徵)

勢にあり、曰く其の教育の目的にあり、曰く其の教育の方法に在り。彼は精を窮め微に入る白鹿洞の先生に非ず、彼は宇宙を呑み幽明を窮むる橄欖林の夫子に非ず。彼は僅かに二十七歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ。而して彼が實力よりも多くの感化を人に及ぼし、彼が人物と匹敵する、或點に於ては寧ろ彼より優れる弟子を出したるは何ぞ。「感在知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸着すれば、轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては物も亦碎け彼も亦碎く。彼の全體は燃質を以て組織せ

インスピレ
ーション
Inspiration.

られたり。火氣に接すれば忽ち焰と爲る。其の焰と爲るや、銀も鎔すなり、金も鎔すなり、瓦も鎔すなり。彼の人に接するや、全心を擧げて接す。彼の人を愛するや、全力を擧げて愛す。彼は往々インスピレーションの爲に精神的高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いて此の高潮に接せしむ。知るべし、彼が教育の道、多岐無し、たゞ己が眞骨頭、大本領を據へて以て他に及すのみなるを。

ペスタロッ
チ
瑞西の教育
家。

彼は變則なるペスタロッチなり。彼は實物教育の大主義を踐行せり。たゞペスタロッチに異なるは、一は天地萬有を以て實物教育の資と爲し、他は活世界の時事を以て實物教育の資と爲したるのみ。其の嬰兒の如き赤心を以て

軒輕
優劣

其の子弟を愛し、自ら彼等の仲間と爲り、彼等の中に住し、彼等の心の中に住するに至りては、二者豈軒輕あらんや。

彼の門人を遇する、一に赤心を以てす。至誠にして動かざるもの未だこれ有らずとは、彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は能く言ふよりも、寧ろ能くこれを行へり。單に此の一點に於ては、東西古今を通じて彼に優る教育家を見出すこと決して容易の業に非ず。而して此の精神を以て其の所信を他に施す。故に其の傳道心に至りては、此の山を彼處に移す程の勢力ありしなり。彼が眼中敵も無く味方も無く、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼は社會の寵兒に非ず。彼が子弟も亦然りき。彼等は恰も雪を踏ん

陶冶
薰陶

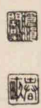
でアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌が
ん爲には互に負戴し抱擁し、自他の體温に依りて其の呼吸
を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生
ず。先生前に倒れて弟子後に振ふ。彼は知己の感を以て
其の子弟を陶冶せり。彼は活ける模範を爲りて、子弟に先
だちて難に殉ぜり。否、子弟の爲に難に殉ぜり。此の時に
於て懦夫と雖もなほ起つべし。況や平生の素養ある者に
於てをや。況や恩愛の情、知己の感ある者に於てをや。彼
は其の子弟に向つて、我が如く做せといへり。而して做せ
り。彼等豈徒然として止まんや。
其の時を以てすれば二年半に満たず。其の處を以てす

杉氏邸
松陰は杉百合
之助の次男に
して吉田氏を
嗣ぐ。

道徳文章敘ニ蘇
倫。精忠大節
感ニ明神。如今
廟廊棟梁器。多
是松門受ノ教
人。博文

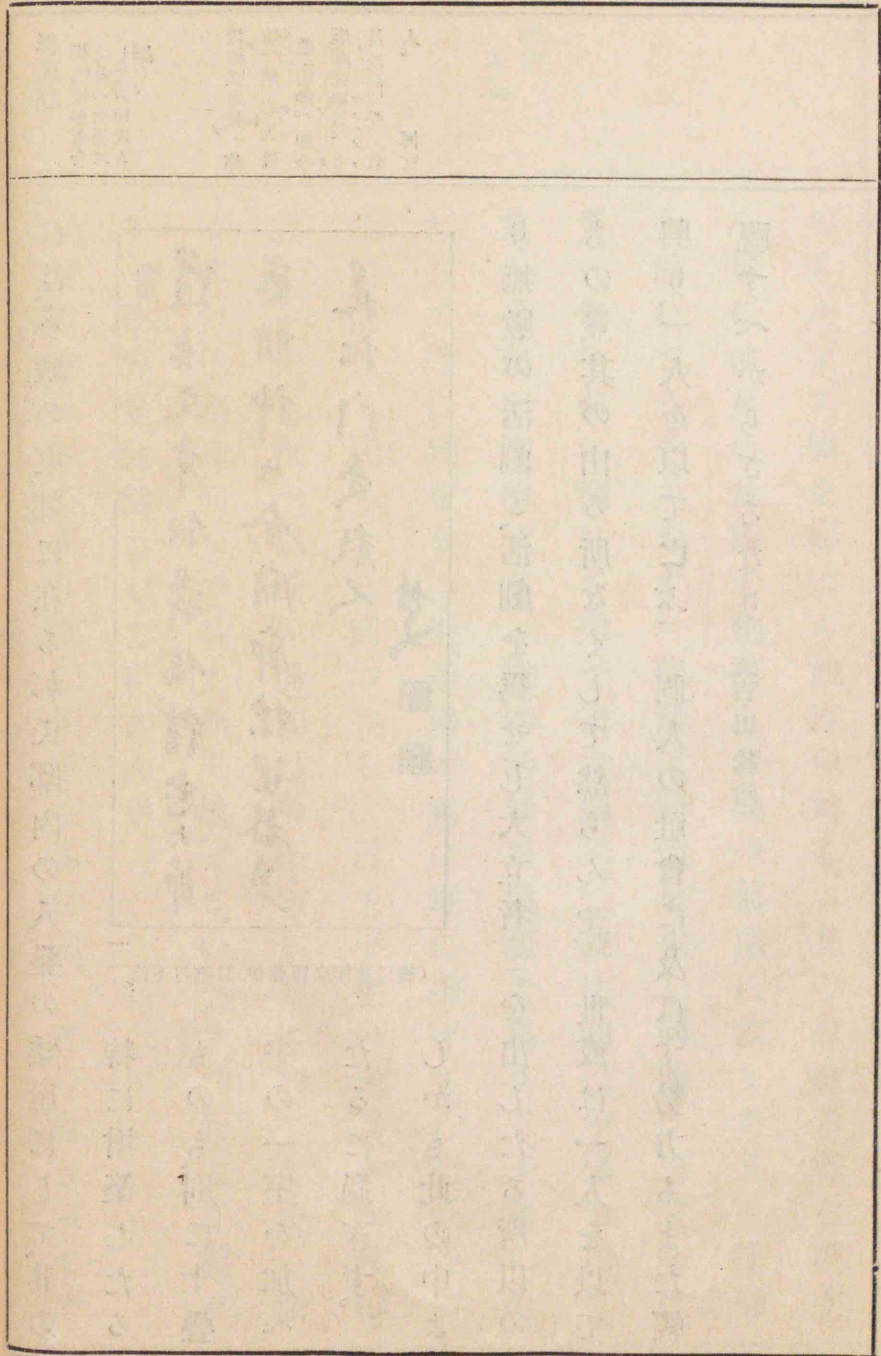
道徳文章叙蘇倫精忠大節
感明神也今廟廊棟梁器多
是松門受教人

松文



(書に並作文博藤伊)詩塾村下松

れば、萩城の東郊に在る杉氏邸内の八疊の矮屋にして、其の
特に増築したる
ものも、別に十疊
半の一室を加へ
たるに過ぎず。
しかも此の中よ
り無數の活劇と、活劇を爲せし大立者を出したる所以の
もの、豈其の由る所なくして然らんや。世或は一人を以て
興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及ぼす勢力もまた輕
視すべからざるなり。(吉田松陰)



後篇

徒然草抄

徒然草に就いて

新村 出

新村 出
文學博士、京
都帝國大學教
授。

花は盛りに
百三十七段。

法然上人が
三十九段。

徒然草は私が少時から愛誦した書物の一つで、今なほこれを読む毎に感興を新にすると同時に、往年の思出に耽ることが多い。國文の讀

本で「花はさかりに月は限なきをのみ」とあるあの名句を誦したのが抑、の始まりで、それから今日に至るまで、をりにふれてこの書を繰返したことが何度あるだらう。法然上人が念佛中ぬねむりをしたならば、眼がさめて後再び念佛すればそれでよいのだと、人に説き諭されたところある一條を、かの書から抄録して、その頃



徒然草に就いて

ふれく
百八十一段。

かにかにほひ
妙なる色に
あらはれて
みりの花
や春をつぐ
らむ
兼好

一昨年
大正四年。
今上
大正天皇。
内侍所の
二十三段。
諒闇の年
二十八段。

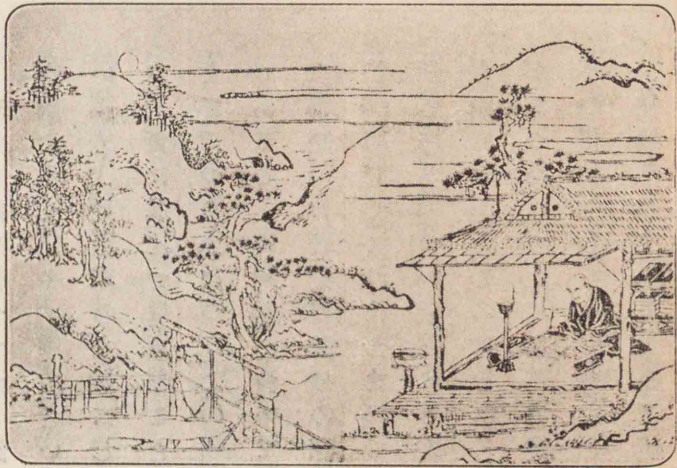
心學道話めいたことを好んでゐた郷里の老父のもとに送つた事などが、私が徒然草を利用した最初かと記憶してゐる。もう一つ覚えてゐるのは「ふれく」こゆきの童歌を書中から見出して「雪やこんく」と興じた遠いく幼時を追想して、懐かしさに堪へなかつた事である。こんなうぶな教訓や詩趣に感じ入つてゐたのも、數へれば、もう二十四五年前になる。

かにかにほひ
妙なる色に
あらはれて
みりの花
や春をつぐ
らむ
兼好

近きころの聯想を記してみると、第一に一昨年今上御即位式のあくる日の夕方、賢所大前の光景を拜した時には、「内侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなり。」と本書に書かれた一節を思ひ浮べずには居られなかつた事である。それにひきかへ、諒闇の年ばかりあはれなることはあらず。」といふ一段にて、始めて諒闇といふ文字を覺えたのも、少時こ

唐の物は
百二十段。

卷末の問答
二百四十三
段。



(兼好閑居徒然草古版所載)

の徒然草によつてであつたから、先つころの諒闇のをり、異様なるぞゆゝしき有様を見るにつけても、しばしばこの書のその節が眼に映じたのであつた。斯る尊きあたりの御事はさておき、國家經濟上の大事たる海外貿易に關しては、兼好法師がいちはやくも、唐のものは藥の外はなくとも事かくまじ、書どもはこの國に多くひろまりぬれば」と説破して、鎖國論者の先驅となつてゐる名高いその一條を讀むと、この隨筆の史的價值はよくわかるやうに思ふ。法師が八つになつた年、佛はどんなものかと父に尋ねたとある卷末の問答は、妙味ある言草として、何人も均

徒然草に就いて

上田敏
文學博士、京
都帝國大學教
授、大正五年
歿、年四十三
鯉のあつもの

百十八段。
堅魚
百十九段。

松下禪尼
百八十四段。
平家物語
二百二十六
段。

梁塵秘抄
十四段。
道眼上人
百七十九段。

しく嘆稱する所であるが、曾て上田敏さんは、その伊曾保物語考に於て、
意表な處にうまくあの話を活用したことがある。
私が京都に移つてから、鯉のあつものに舌をうつ機は度重なつても、
東國にもてはやす堅魚といふ魚を口にする事の少いのを嘆じつゝ、
いよゝゝ徒然草の或るふしゝゝに興味を感ずることが深くなつて來た。
更に進んでは、京都ことばの變遷をたどるにつけ、關東武士の性行
をあげつらふにつけ、この隨筆から拾ひ得られる材料のなかゝゝ豊富
であることに益氣がついて來た。松下禪尼の古い訓言はもとより、平
家物語の作者、梁塵秘抄の郢曲のことなど、人口に膾炙する得がたき史
料が、同じくこれに含まれてゐるのは、私の今さら指摘するまでもない
所である。つい近頃にも入宋の沙門道眼上人の事歴は、もう少しわか
らぬものかと、この書をひろげながら一二の佛教史家と話し合つた事
があつた位で、隠れたる史實が散見してゐることが少からぬのは、徒然
草の價值をして一層増さしめるものと云へよう。
徒然草の文學史上の價值などは、茲に更めて絮説するの要はない。

現に私などの精神生活、研究生生活の上に少からぬ交渉をもつてゐるの
が、何よりの價值だ。詩趣逸興さては教訓を、現代の人々にも與へるこ
との大いなるを思へば、本書の價值は眞に不滅である。(南蠻更紗)

和歌四天王
淨辨・慶運・賴
阿・兼好

兼好、本姓は卜部、名は兼好、世々京の吉田社の祠官であつたから、又吉
田姓を稱した。後宇多院に仕へて寵用せられ、左兵衛尉に任ぜられた
が、院崩御の後、世を遁れて佛に歸し、俗名をそのまゝに兼好といひ、木曾
に行脚して山中に廬を結び、諸國を遍歴して悠々自適したが、久しから
ずしてまた京に歸り、洛西雙岡に住んだが、晩年伊賀に至り、國見山の麓
に寂した。時に正平五年、約五八〇年前、年六十八。兼好人と爲り酒脱、
學、神儒佛老に通じ、文章和歌を善くして、當時和歌四天王の一に數へら
れた。その著には徒然草の外に歌集一卷がある。

竹の園生

親王をさして漢の文帝の皇子なる梁の孝王が竹園に住まれし故事による。

一人の人

攝政又は關白。

舍人など賜

はる際

攝政關白は十人、大臣大將は八人、納言參議は六人、中將は四人、少將は二人、舍人を賜ふ。木のほし

一 つれづれなるまゝに、目ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごころを、そこはかこなくかきつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ

いでや、この世に生れては、願はしかるべきごころをおほかめれ。みかごの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごごなき。一人の人の御有様はさらなり、たゞ人も舍人など賜はる際はゆゑしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれど猶なまめかし。それより下つかたは程につけつゝ、時に逢ひしたり顔なるも、自らはいみじと思ふらめど、いこくち惜し。法師ばかり羨ましからぬ者はあらじ。人には木のほしのやうに思はるゝよ。清少納言がかけるも、げにさる事ぞかし。勢猛に罵りたるにつけていみじは見えず。

清少納言

一條天皇の皇后に仕へし女官。

栗栖野

京都府宇治郡、醍醐寺の邊。

人はかたち有様の優れたらんこそあらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、飽かずむかほまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ、本性見えんこそ、くち惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらぬ、心はなごか賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心ざまよき人も、さえなくなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

二 此の木なからましかば

ありたきごころは、まことしき文の道作文、和歌管絃の道、また有職に公事のかた、人のかゞみならんこそいみじかるべけれ。(第一段) 神無月の頃、栗栖野といふ處を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、はるかなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ、笕のしづくならでは、つゆおこなふ

二 此の木なからましかば

ものなし。閑伽棚に菊紅葉など折散らしたる、さすがに住む人の
あればなるべし。かくてもあられけるよ、あはれに見るほごに、
かなたの庭に、大きな柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まは
りをきびしく圍ひたりしこそ、すこしこそさめて、この木なからま
しかばとおぼえしか。(第十一段)

三 同じ心ならん人

同じ心ならん人、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはか
なき事も、うらなく言ひなぐさまんこそ、うれしかるべきにさる人
あるまじければ、つゆ違はざらん、むかひ居たらんは、ひとりある
心地やせん。たがひに言はんほどの事を、ばげに聞かひある
ものから、いさゝか違ふところもあらんこそ、我はさやは思ふな
ご、争ひ悪み、さるからさぞごも打語らはば、つれづれなぐさまめご
思へごげにはすこしかこつ方も、われごひごしからざらん人は、大

方のよしなし事いはんほごこそあらめ、まめやかかの心の友には、は
るかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしきや。(第十二段)

四 旅

いづこにもあれ、しばし旅だちたるこそ、目さむる心地すれ。そ
のわたりこゝかしこ見ありき、ななかびたる所、山里などは、いと目
なれぬ事のみぞ多かる。都へたよりもこめて、文やる、その事かの
事、便宜に忘るな、なごいひやるこそをかしけれ。さやうの所にて
こそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能
ある人、かたちよき人も、常よりはをかしごこそ見ゆれ。寺社など
に忍びてこもりたるもをかし。(第十五段)

五 折節のうつりかはり

をりふしの移り變るこそ、物ごこにあはれなれ。
物のあはれは秋こそまされ。ご人ごこにいふめれご、それもさる

物のあはれ

春はたい花の
一重に咲くば
かり物のあは
れは秋ぞまさ
れる(拾遺集)
讀人不知

三味線
こぞ

梅の匂

花橋は
五月まつ花橋
の香をかげば
昔の人の袖の
香ぞする
(在原業平)

梅の匂
お前近き紅梅
の(中略)橋な
らねど昔思ひ
出でらるゝつ
まなり(源氏
物語)

藤の
見るもなほお
ぼつかなきは
春の夜の霞の
うちにあける
藤波(和泉式
部)

灌佛
四月八日、即
ち經迦の誕生
日に、佛像に
香水を灌ぐ佛
事

ものにて、今一きは心も浮きたつものは春のけしきにこそあめれ。
鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、桓根の草萌
え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼けしきだ
つ程こそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎ
ぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ悩ます。花橋
は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへのことも立返り戀しう
おもひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、
すべて思ひすてがたきこと多し。
灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあは
れも人のこひしさもまさされ。人の仰せられしこそ、げにさるもの
なれ。皐月、あやめふく頃、早苗さる頃、水雞のたゝくなご心細から
ぬかは。水無月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふす
ぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

祭
賀茂祭。陰曆
四月の中の酉
の日。

六月祓
六月三十日に
行はるゝ、行
事。夏越祓。

棚機祭る
七夕祭、即ち
七月七日の星
祭をいふ。

御佛名
十二月十九日
より三日間は
禁中にて行は
れたる佛事。

荷前の使
年の暮に初穂
を主なる段葛
にすゝむる爲
に遣さるゝ勅
使。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴
きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取りあつめ
たることは秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。
いひつゞくれば、皆源氏物語枕草紙などに事ふりにたれど、同じこ
ごまた今さらにはじこにもあらず。おぼしきこといはぬは腹
ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かい
やり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。
さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ／＼おさるまじけれ。汀の
草に紅葉の散りごままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙
の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃
ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の
寒けくすめる廿日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前
の使立つなごぞ、あはれにやんごとなき。公事ごもしげく、春のい

五 折節のうつりかはり

一一

追儼 大晦日の夜、禁中にて鬼を追拂ふ様をなしたる公事。おにやらひ。
 四方拜 元且未明、天皇の天地四方を拜し給ふ儀式。

そぎに取りかさねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。
 追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに松ごもごもして、夜半すぐるまで人の門敲き走りありきて、何事にかあらん、ごころしくのゝしりて、足を空にまごふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。(第十九段)

六 心なぐさむ事

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の月ばかりおもしろき物はあらず。こいひしに、又一人「露こそあはれなれ」と、争

沅湘 盧山花開楓葉衰、出門何處望、京師、沅湘日夜東流去、不爲愁人住、少時、戴叔倫。
 嵇康 竹林七賢人の一人。
 山澤 遊山澤、觀魚鳥、心甚樂之、(文選)
 露臺 宮中にある屋根なきうて。
 朝餉 主上に朝の御膳を奉る所に清涼殿の中に在り。

ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて、きよく流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去り、愁人の爲にさゞまること少時もせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を觀れば、心たのしぶ」といへり。人遠く、水草きよき所に、さまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらず。(第二十一段)

七 末の世とはいへど

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世つかずめでたきものなれ。露臺朝餉、何殿何門などは、いみじきも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき、小部小坂敷高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ。「陣の夜のもうけせよ」といふこそいみじけれ。よんのおごりのをば、かいこもしごうよ。なごいふ、まためでた

七 末の世とはいへど

障節會などの時、諸卿の坐する所、よんのちとど

徳大寺太政大臣天手の御座所。藤原實基。

帽額もかう。御簾のやうに張る布。平常は錦など花やかなるを用ふ。

平緒束帯のとき、腰より袴の上、に垂れたるもの。

具足道具。

し。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人ごものしたり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶり居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり。ごぞ徳大寺の太政大臣は仰せられける。
(第二十三段)

八 諒闇の年

諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷を下げ蘆のみすをかけて、布の帽額あらしく、御調度ごもおろそかに、みな人の装束、太刀平緒まで、ここやうなるぞゆしき。
(第二十八段)

九 過ぎにし方

しづかに思へば、よろづに過ぎにし方のこひしさのみぞせんかたなき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何こなき具足取りし

た、め、残しおかしと思ふ、反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなく變らず、久しきいごかなし。
(第二十九段)

一〇 人の亡きあと

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便あしくせばき所にあまたあひ居て、後の業ごも營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐる程、物にも似ぬ。はての日は、いと情なう、互にいふこともなく、我賢げに物ひきした、め、ちりぢりに行きあかれぬ。もこの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。
「しかく」の事は、あなかしこ、跡のため忌むなることぞ。なごいへ

中陰人の死後四十日間の

去る者は
去者日以_増。 生者日以_耗。
(文選)

るこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。
年月経てもつゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎し。とい
へることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしな
しごといひて、うちも笑ひぬ。骸はけうごき山の中にをさめて、さ
るべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔蒸し、木の葉降
り埋みて、夕の嵐夜の月のみぞこここふよすがなりける。

いづれの人
古墓何代人。
不知_二姓_一與_三名_一。化爲_二路傍_一土。年々_二春草_一生。(白氏文集)
薪に摧かれ
古墓_二形爲_一田。松柏摧爲_二薪_一。
(文選)

思ひ出でてしのぶ人あらん程こそあらめ、そもまた程なく失せて、聞き傳ふるばかりの末々はあはれとやはおもふ。さるは跡こ
ふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草
のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐に咽びし松も、
千年を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ。そのか
ただに無くなりぬるぞ悲しき。(第三十段)

一一 雪のあした

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべきことあり
て文をやるごと、雪のこと何ともいはざりしかへりごに、この雪
いかゞ見るご、一筆のたまはせぬ程のひが、しからん人のおほ
せらるゝこと聴きいるべきかは。かへすくくちをしき御心な
り。といひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばか
りのこと忘れがたし。(第三十一段)

一二 荒れたる庭

九月廿日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく
事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れ
たる庭の露繁きに、わざとならぬ匂しめやかに打ちかをりて、忍び
たるけはひ、いと物哀なり。よきほごにて出で給ひぬれど、猶事さ
まの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今すこ
し押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口

妻戸
左右に開く
戸

一二 荒れたる庭

惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。其の人程なく失せにけりぞ聞き侍りし。(第三十二段)

一三 法然上人

或人法然上人に、念佛の時、眠におかされて行を怠り侍ること、いかゞしてこのさはりをやめ侍らん。と申しければ、目の覺めたらんほご念佛し給へ。と答へられたりける、いと尊かりけり。又、往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり。といはれけり。これも尊し。又、疑ひながらも念佛すれば往生す。ともいはれけり。これもまた尊し。(第三十九段)

一四 稻葉の露

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いとゆるづきたるさまにて

法然上人

淨土宗の開祖、建暦二年(約七)〇年八月十日、寂、年八十。

念佛

所謂稱名念佛にて、南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて念すること。

狩衣

當時の平常服。まる襟にして袖にくくりあり。

指貫

裾の方を紐にてくくる袴。

惣門

外櫓の正門。

楊

しぢ。車の轆を載する臺。

寢殿

正殿。

遣水

庭先につくりたる小流。

さ、やかなるわらは一人を具して、遙かなる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつ、分け行くほご、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞知るべき人もあらずと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつ、行けば、笛を吹止みて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。楊に立てたる車の見ゆるも、都よりは目こまる心地して、下人に問へば、しかくの宮のおはします頃にて、御佛事なごさぶらふにや。といふ。御堂のかたに法師ごも参りたり。夜寒の風にさそはれくる空だきもの、匂も身に沁む心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房のおひ風、ういなき、人目なき山里ごもいはず心づかひしたり。

心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごごがましく、遣水の音のごやかなり。都の空よりは雲のゆききも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。(第四十四段)

おほかた
ちつとも。

満座興に入ることかぎりなし。暫しかなでて後、抜かんとするに、おほかたぬかれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんご惑ひけり。ごかくすれば、首のまはりかけて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打ちわらんとすれど、たやすくわれず、響きてたへがたかりければ、すべきやうなくて、三足なる角のうへに帷子を打ちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人のあやしみ見る



筆 蕙 一 田 浮

枕がみ
枕頭。

かけうげ
缺けて孔あ

ことかぎりなし。くすしのもごにさしいりて對ひゐたりけん有様、さこそこやうなりけめ。物を言ふもくゞもりごゑに響きて聞えず。「かゝることは文にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほごに、ある者のいふやう、たごひ耳鼻こそ切れうすこも、命ばかりはなごか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みるたりけり。

(第五十三段)

一八 名を聞くより

名を聞くより、やがて面影は、おしはからるゝ心地するを、見る時

は、又かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家のそこほごにてぞありけんぞ覺え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。又いかなるをりぞ、たゞいま人のいふ事も、目に見ゆる物も、我が心のうちも、かゝる事の、いつぞやありしかとおぼえて、いつこは思ひ出でねども、まさしくありし心地のするは、わればかりかく思ふにや。

(第七十一段)

一九 いやしげなるもの

いやしげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前裁に石草木の多き、人にあひて言葉の多き、願文に作善おほく書きのせたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。(第七十二段)

二〇 入りたゝぬさま

願文 願意を認めて
神佛にたてまつる文。
文車 車のしかけし
たる書架。

世に 「世の中に」の
意にあらず。
「世にも」の意
なり。比較の
最上級

何事も、入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知りかほにやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥かしき方もあれど、自らも、いみじと思へるけしき、かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口おもく問はぬかぎり、言はぬこそいみじけれ。(第七十九段)

二一 人の心

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されども、おのづから正直の人なごかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは世の常なり。至りて愚なる人は、たま〜賢なる人を見て、之をにくむ。「おほきなる利を得んがために、すこしきの利を受けず、いつはり飾りて、名を立てんぞす。」とそしる。おのれが心にたがへるによりて、此のあざけりをなすにて知りぬ。この人

下愚の性
上智與下愚不移(論語)
驥をまなぶ
「希驥之馬亦驥之乘也、希驥之人亦驥之乘也。」(楊子法言)

宇治

京都府宇治郡宇治川の北、宇治村、及宇治町一帯の稱。

なまめきたる
風流なる。

木幡

京都府宇治郡

奈良法師

奈良の東大寺興福寺などの僧侶。

は下愚の性、うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねて大路を走らば、すなはち狂人なり。悪人のまねて、人を殺さば悪人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばんを賢といふべし。(第八十五段)

二二 下部に酒飲ますること

下部に酒飲ますることは心すべきことなり。宇治にすみけるをのこ、京に具覺坊ぐかくぼうとてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。ある時むかへに馬を遣はしたりければ、はるかなる程なり、口つきのをのこにまづ一度せさせよ。とて、酒を出したれば、さし受けくよよと飲みぬ。太刀うちほきてかひくしげなれば、頼もしくおぼえて召具して行くほどに、木幡ぼんぱのほどにて奈良法師の兵士數多具して遇ひたるに、このをのこ立向ひて、日暮

山だち
山賊。

によび臥し
うめき臥し。

れにたる山中に、怪しきぞ、ごまり候へ。といひて、太刀を引抜きければ、人も皆太刀抜き、矢はげなごしけるを、具覺坊手をすりて、うつし心なく酔ひたるものに候。枉げてゆるし給はらん。といひければ、各、嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、御坊は口惜しきことし給ひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名仕らんごするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること。ご怒りて、ひた斬りに斬り落しつ。さて、山だちあり。ごの、しりければ、里人おこりて出であへば、われこそ山だちよ。といひて、走りかゝりつ、斬りまはりけるを、あまたして手負はせ、うち伏せて縛りけり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。淺ましくて、をのこごもあまた走らかしたれば、具覺坊は梶原かぢのらによび臥したるを、求め出でて昇きもてきつ。辛き命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたはになりにけり。(第八十七段)

二二 下部に酒飲ますること

猫又

老猫の尾が兩
岐に分れて、性
質猛惡にて變
化自在なりとい
ふもの。

何阿彌陀佛

何とは確なら
ぬ意なり。時
宗の僧名に何
あみかあみと
いふ有り、陀
佛の二字は略
してよむ口傳
なり。

行願寺

京都一條の
かうたうの寺
堂の寺號。

小川

賀茂川よりせ
き入れし一條
邊の溝の名。

二三 猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて猫またになりて、人ごることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛ごかや、連歌しける法師の、行願寺のほごりにありけるが聞きて、「ひごりありかん身は心すべきここにこそ。」と思ひける頃しも、あるところにて、夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小河のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足のもごへふごより來て、やがて掻きつくまゝに、頸のほごをくはんごす。肝心もうせて、防がんごするに力もなく、足もたゞず、小川へころび入りて、たすけよや。ねこまたよや、よや。」ごさけばば、家々より松ごもごもして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて、河の中よりいだき起したれば、連歌の賭物ごりて、扇小箱なご懷に持ちたるも

もろ矢

一對の矢即二
本の矢。端矢
(はぎ)と乙矢
(おとや)

刹那

刹那は佛語、
壯士の一彈
指の間に六十
刹那ありとい
ふ。瞬間。

二四 もろ矢

水に入りぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふく／＼家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるごぞ。(第八十九段)

ある人、弓射る事を習ふにもろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしご思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせんご思はんや。懈怠の心、みづから知らずごいへごも、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねてねんごろに修せん事を期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。なんぞ只今の一念において、たゞちにする事の甚

だ難き。(第九十二段)

二五 寸陰惜しむ人なし

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。愚にして怠る人の爲にいはず、一錢かるしといへども、これをかさぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人は、一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、たちまちに至る。されば道人は、ごほく日月を惜しむべからず。たゞ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし。もし人來りて、わが命、明日は必ず失はるべし。ご告げ知らせたらんに、今日の日、間、何事をか頼み、何事をか營まん。われらが生ける今日の日、なんぞ其の時節に異ならん。一日のうち、に飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして、おほくの時を失ふ。そのあまりのいとま、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事

謝靈運

晋人。文章の美、江左第一と稱す。

法華の筆受

筆受は講述を筆記すること。こゝは法華經經譯の際之を漢字に寫すものをいふ。

惠遠

晋代の人、廬山虎溪の東林寺に住す。

白蓮

白蓮社として惠遠が院の名なり。謝靈運これに入らんことを求めたれど、惠遠その心雜なるを以て之を許さず。

あきして、指圖して。

を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月をわたりて一生をおくる、尤も愚なり。謝靈運は、法華の筆受なりしかごも、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮のまじはりをゆるさざりき。しばらくも是なき時は死人に同じ。光陰何のためにか惜しむごならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよごなり。(第百八段)

二六 高名の木登り

高名の木登りといひしをのこ、人をおきて、高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危く見えしは、いふ事もなくて、おるゝごきに、軒だけばかりになりて、あやまちすな。心しておりよ。ご詞をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるごもおりなん。いかに斯くいふぞ。ご申しはべりしかば、その事に候。眼くるめき、枝あやふきごは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは、やすき

聖人のいましめ
君子安而不
忘危(易繫
辭)

蹴鞠。

遠きものを
不_レ實_二遺物_一
則_レ遠人格_一尙
書
得がたき寶
不_レ貴_二難_レ得
之_レ貨_一使_二民
不_レ爲_レ盜_一(老
子)
雨にむかひ
「對_レ雨_二戀_一月
序_一朗詠集、
源順」
たれこめて
たれこめて春
のゆくへも知
らぬまに待ち
し櫻も移るひ
にけり(古今
集、藤原因香)

所になりて、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめになへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。(第百〇九段)

二七 唐のものは

唐のものは薬のほかはなくとも事かくまじ。書ごもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してん。もろこしぶねのたやすからぬ道に、無用のものごものみどり積みて、所せく渡しもて來る、いとおろかなり。「遠きものを寶とせず。ごも、また得がたき寶を貴まず。ごも、書にも侍るとかや。(第百二十段)

二八 花はさかりに

花はさかりに、月は限なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭、なごこそ見所おほけれ。歌の

ことばがきにも、花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ。ごも、障る事ありて、まからで、なごも書けるは、「花を見て、といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふ習はさる事なれご、ごにかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。なごはいふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉のこずるに見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほご、又なくあはれなり。椎柴・白檜なごの濡れたるやうなる葉の上、にきらめきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなご、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさからも、月の夜は聞のうちながら、思へるこそ、いとたのもしうを

祭
賀茂の祭。昔
は四月の中
の酉の日に
行はる。

かしけれ。
よき人はひとへにすける様にも見えず、興ずるさまもなほざり
なり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもこに
はねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、は
ては大きなる枝、心なくをり取りぬ。泉には手足さしひたして、雪
にはおりたちて跡つけなご、萬の物よそながら見るこごなし。
さやうの人の祭見しさまいごめづらかなりき。「見ごこいと遅
し。そのほごは、棧敷不用なり。」さて、奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、圍
碁雙六なごあそびて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候。」といふ時に、
おのゝ肝つぶるゝやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾
はり出でて押しあひつゝ、一事も見漏らさじごまもりて、「ごあり、か
かり。」と物ごこにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らんまで。」といひて
下りぬ。たゞ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげ

牛車

葵かけわた
して
賀茂の祭には
簾・柱などに
葵を懸く。一
名葵祭。

なるは、睡りていこも見ず。若く末々なるは、宮仕へにたちぬ、人の
うしろにさぶらふは、様あしくも及びかゝらず。わりなく見んと
する人もなし。
何ごなく葵かけ渡してなまめかしきに、明けはなれぬ程、しのび
て寄する車ごものゆかしきを、それかかれかなご思ひ寄すれば、牛
飼下部なごの見知れるもあり。をかしくもきらくしくも、さま
ざまに行きかふ、見るもつれなくならず。暮るゝ程には、立て並べ
つる車ごも、所なく並みあつる人も、いづかたへ行きつらん程なく
稀になりて、車ごものらうがはしさもすみぬれば、簾疊も取りはら
ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて
あはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。
かの棧敷の前をこゝら行きかふ人の見知れるがあまたあるに
て知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せな

鳥部野 東山五條阪附近。古來火葬場として名高し。
舟岡 舟岡山。愛宕郡大宮村にあり。鳥部野と共に古來よりの火葬場。

ん後、わが身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなるうつはものに水を入れて、細き孔をあけたらんに滴ること少しといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都のうちには多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野舟岡、さらぬ野山にも送る數多かる日はあれど、おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、造りてうち置くほごなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。けふまでのが、れ來にけるは有りがたき不思議なり。暫しも世をのどかには思ひなんや。兵のいくさに出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、靜かに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へる、いとはかなし。靜かなる山の奥、無常のかたきほひ來らざらんや。その死にのぞめること、いくさの陣にすゝめるにおなじ。(第百三十七段)

二九 能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、うちよく習ひ得てさし出でたらんこそいと心憎からめ。と常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。いまだ堅固、かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、妄りにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、雙なき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

三〇 一道にたづさはる人

(第百五十段)

三〇 一道にたづさはる人

三七

骨
器用
堪能
骨
器用
堪能

一道にたづさはる人、あらぬ道の筈に臨みて、あはれ、わが道なら
 ましかば、かくよそに見侍らじものを。こいひ、心にも思へること、常
 の事なれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道のうらやましく覺
 えば、あな羨まし。なごか習はざりけん。こいひてありなん。わが
 智をこりいでて、人にあらそふは、角あるものの、角をかたづけ、牙あ
 るものの、牙をかみいだすたぐひなり。人として、善にほこらず、
 物と争はざるを徳とす。他にまさる事のあるは、大きな失なり。
 品の高さにて、才藝の優れたるにても、先祖のほまれにても、人に
 まされりと思へる人は、たごひ詞に出でてこそ言はねども、内心に
 そこばくのとごがあり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人
 にもいひ消たれ、わざはひをも招くは、たご此の慢心なり。一道に
 も、まことに長じぬる人は、みづから明かに其の非を知るゆゑに、こ
 ころざし常にみたずして、つひに物にほこる事なし。(第六十七段)

阮籍之者、眠

三二 さしたる事なくて

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて
 行きたりとも、其の事はてなば、ごく歸るべし。久しく居たる、いご
 むつかし。人ごむかひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづか
 ならず、よろづの事はりて、時をうつす。たがひのため益なし。
 いごはしげに言はんもわろし。心づきな事あらん折は、なかな
 かそのよしをもいひてん。同じ心にむかはまほしく思はん人の、
 つれづれにて、今しばし。今日は心しづかに。なごいはんは、このか
 ぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。そ
 の事ごなきに、人の來りて、のごかに物がたりして歸りぬる、いごよ
 し。また、文も久しく聞えさせねば、なごばかり、いひおこせたる、い
 ごうれし。(百七十段)

三二 降りて雪

阮籍
 晋代の人、竹
 林七賢人の
 一人、心にあ
 る友人は、青
 友に、は、あ
 ぬを、な、し
 を、な、せ、り
 と、い、ふ。

竹林之閑後

讚岐の典侍

堀河天皇の官女。天皇御病氣の頃より鳥羽天皇御即位までを記したる日記三卷あり。

「降れ〜こ雪、たんばのこ雪といふこと、米搗き篩ひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこ雪といふべきを誤りて、たんばのこはいふなり。」「垣や木のまたに。」と歌ふべしとある物しり申しき。昔よりいひけるここにや。鳥羽の院をさなくおはしまして、雪の降るにかく仰せられけるよし、讚岐の典侍が日記に書きたり。

(第百八十一段)

三三 松下禪尼

時頼

北條氏。鎌倉五代の執權。

禪尼

安達景盛の女。北條時氏の室。

義景

安達氏。秋田城介となる。

けいめい

經營の字音の轉なりといふ。設備周旋などの意。

相摸守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守相摸を入れ申さるゝ事ありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ、張られければ、せうこの城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、賜はりてなにがし男に張らせ候はん、さやうの事に心得たるものに候。と申されければ、その男、尼が細工によもまさり侍らじ。とて、猶一間づゝ張られけるを、義景、みなを張

聖人の心

子曰、以約失之者鮮矣。子曰、奢則不孫、儉則固。與其不孫、寧固。(論語)

導師

佛事說法のとき主となる僧

りかへ候はんは遙かにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくや。と重ねて申されければ、尼も後はさは〜と張りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり。物はやぶれたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、わかき人に見ならばせて心づけんためなり。と申されける、いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつほどの人を子に持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけりぞぞ。(第百八十四段)

三四 一事を勵むべし

あるもの子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經なごして世渡るたつきともせよ。といひければ、をしへのまゝに説經師にならん爲に、まづ馬に乗りならひけり。輿、車持たぬ身の導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんにも、じりにて落ち

早歌
後世の小唄の類

なんは心うかるべしとおもひけり。次に佛事の後酒なごすゝむるここあらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひけり。二つの業やうく境に入りければ、いよゝよくしたく覺えてたしなみける程に、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。

あらます事
豫定の事

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこのことあり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんご、行末久しく、あられますことごも、心にはかけながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にもみ紛れて、月日を送れば、事毎になす事なくして、身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず。悔ゆれども取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。されば一生のうち、むねごあらまほしからんことの中に、いづ

東山
京都の東方につらなる山々の總稱

れかまさるごよく思ひくらべて、第一の事を案じさだめて、その外は思ひすてて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來らんうちに、少しも益のまさらん事をいごなみて、その外をばうち捨てて、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじご心にとりもちては、一事も成るべからず。

たごへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすてて大につくがごとし。それにごりて、三つの石を捨てて十の石につくごは易し、十を捨てて十一につくごは難し。一つなりごもまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて東山に用ありて、すでに行きつきたりごも、西山に行きてその益まさるべきごを思ひ得たらば、門よりかへ

西山
東山に對して西の方嵯峨方面の山をいふ。

りて西山に行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、この事をば先づいひてん、日をさゝぬことなれば、西山の事は、歸りてまたこそ思ひ立ためと思ふゆゑに、一時の懈怠ヒウヤクすなはち一生の懈怠ヒウヤクとなる。これを恐るべし。

一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず、人のあざけりをも恥づべからず。萬事に換へずしては、一の大事成るべからず。(第百八十八段)

三五 くちなは

龜山殿建てられんこて、地をひかれけるに、大きなくちなは數も知らず凝り集りたる塚ありけり。こゝの神なりといひて、事によしを申しければ、「いかゞあるべき」と勅問ありけるに、「古くより、此の地をしめたる物ならば、さうなくほりすてられがたし」と皆人申されけるに、此のおごゝ一人、王土に居らん蟲、皇居を建てられんに、

御龜山天皇
御龜山天皇

龜山殿
龜山天皇御讓位の後、つくられたる嵯峨龜山の山莊

此のおとこ
徳大寺實基公

大井川
嵐山の下を流る川

最明寺入道
北條時賴

平宣時
北條氏。別姓大佛。時房の孫

何のたゝりをか爲すべき。鬼神はよこしまなし。こがむべからず。たゞ皆掘りすつべし。と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたゝりなかりけり。(第二百七段)

三六 最明寺入道

平宣時朝臣、老の後むかしがたりに、最明寺入道、ある宵の間に呼ばるゝ、ここありしに、「やがて」と申しながら、直垂ナカササのなくてさかくせしほごに、また使來りて、直垂ナカササなどのさぶらはぬにや。夜なればこゝやうなりともこく。とありしかば、なえたる直垂うちノのまゝにてまかりたりしに、銚子チウジにかはらけ取添へてもて出でて、「この酒をひこりたうべんがさうくしければ申しつるなり。肴ツクシこそなけれ。人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求めたまへ。とありしかば、紙燭シヤクさしてくまぐ求めしほごに、臺所の棚に、小土器に味噌ミソのすこしつきたるを見出でて、「これぞ求め

えてさふらふ。と申ししかば、事足りなん。さて、こゝろよく數獻におよびて、興に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。と申されき。(第二百十五段)

三七 人の物を問ひたるに

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝに云はんは、をこがましさにや、心まごはすやうに返り事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほ定かにと思ひてや問ふらん。又まことに知らぬ人も、なごかなからん。うらゝかに言ひ聞かせたらんは、おごなく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、さても其の人の事の淺ましきなどばかり言ひ遣りたれば、いかなる事のあるにかご、おしかへし問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞き漏らすあたりもあれば、おぼつかかなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべき事かは。

かやうの事は、物なれぬ人のある事なり。(第二百三十四段)

三八 主ある家には

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入り來ることなし。主なき所には、道行く人みだりに立入り、狐鼻やうのものも、人げにせかれねば所得顔に入住み、こだまなごいふげしからぬかたちも現るゝものなり。また鏡には、色形なきゆゑに、よろづのかげ來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よく物を容る。われ等の心に、念々のほしきまゝに來りうかぶも、心ごいふもの、なきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちをそこばくの事は、入り來らざらまし。(第二百三十五段)

三九 聖海上人

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめでたく造れり。志太の何がしこかや、知る所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人あま

出雲 丹波國桑田郡
に、出雲神社あり、
今國幣中社。
大社 出雲の大社。
鏡川郡 軒築町。

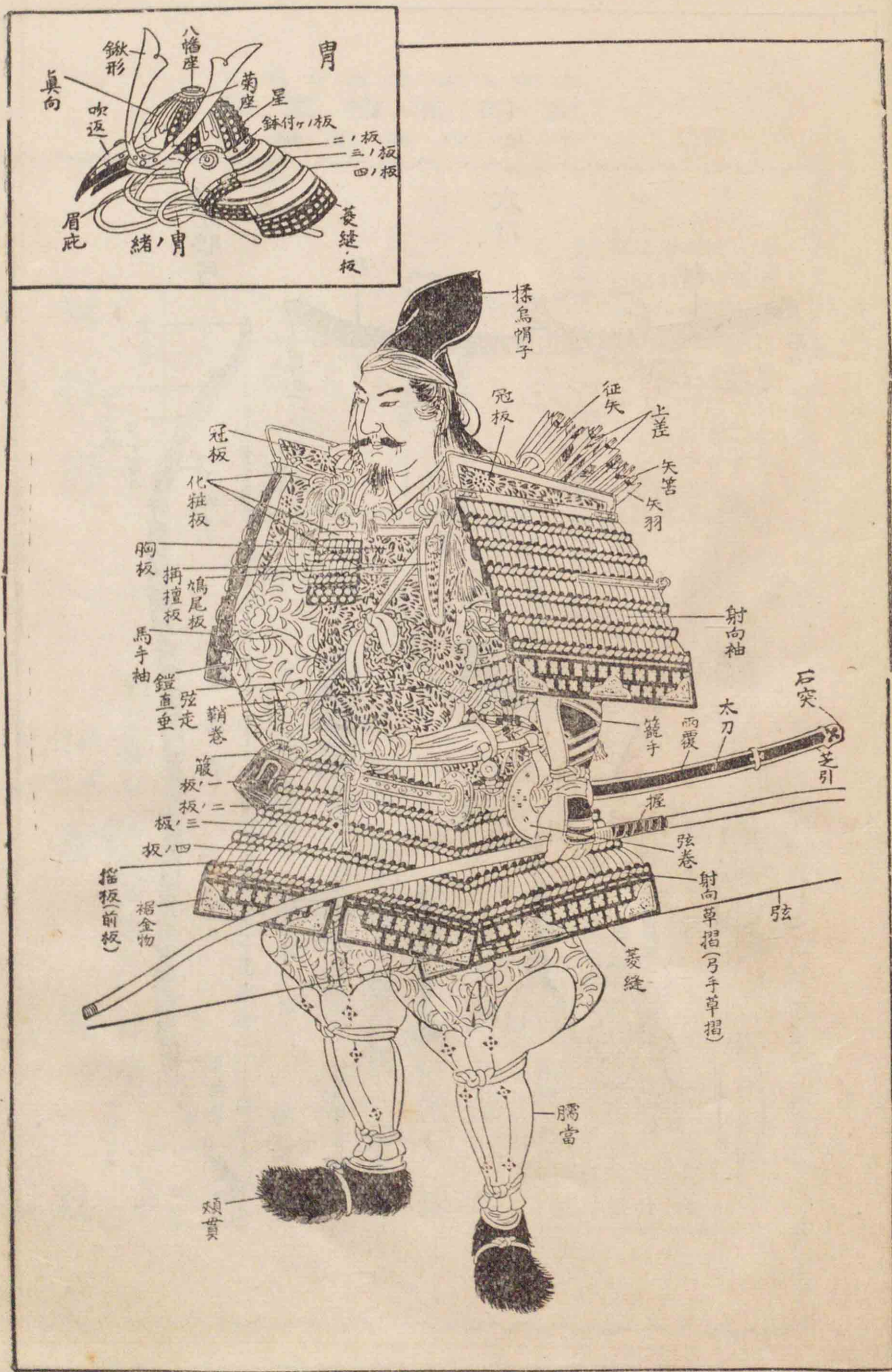
かいらちひ
「攝煉の餅」の
義。飯の餅、牡
丹餅、お萩。

たさそひて、いざたまへ、出雲拜みに。かいらちひめさせん。さて、具
しもて行きたるに、各拜みてゆゝしく信起したり。御前なる獅子、
狛犬背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あ
なめでたや。この獅子の立てやういそめづらし。深きゆるあら
ん。と涙ぐみて、いかに殿（おの）ばら、殊勝の事は御覽じそがめずや。無下
なり。といへば、おのゝ、恠しみて、まことに他にこゝなりけり。都
のつこに語らん。なごいふに、上人猶ゆかしがりて、おとなしく、もの
知りぬべき顔したる神官を呼びて、この御社の獅子の立てられや
う、定めて習あることに侍らん。ちと承らばや。といはれければ、そ
のここに候。さが（おの）なきわらはべごもの仕りける、奇怪に候事なり。
さて、さしよりて据ゑ直して去にければ、上人の感涙いたづらにな
りにけり。(第二百三十六段)

四〇 佛問答

父
ト部兼顯。兼
好はその三男。

八つになりし年、父に問ひていはく、佛はいかなるものにか候ら
ん。といふ。父がいはく、ほこけには人のなりたるなり。と。また
いふ、人は何として佛にはなり候やらん。と。父また、佛の教により
てなるなり。と答ふ。また問ふ、教へ候ひける佛をば何が教へ候ひ
ける。と。又答ふ、それもまたさきの佛の教によりて成りたまふな
り。と。又いふ、その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛に
か候ひける。といふ時、父、空よりや降りけん、土よりや湧きけん。と
いひて笑ふ。問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。と、諸人に語り
て興じき。(第二百四十三段)



昭和四年三月十五日
 文部省檢定
 中學國語教科用

發行所

株式會社

成

社

東京市京橋區加賀町一番地

電話銀座(57)二四九四番
 振替東京一二〇五五番



大正十三年十二月十六日印刷
 大正十三年十二月十九日發行
 大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
 大正十四年二月廿四日訂正再版發行
 昭和三年十一月一日改訂印刷
 昭和三年十一月四日改訂發行
 昭和四年三月十七日改訂再版發行
 昭和五年二月十八日改訂六版發行

昭和國語讀本
 改訂版

卷數	定價	昭和五年臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
四、五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

編輯者 上田萬年
 同 榮田猛猪
 同 鹽野新次郎
 發行所 株式會社 成社
 右代表者 布津純一
 印刷所 東京市芝區芝浦町二丁目三番地

